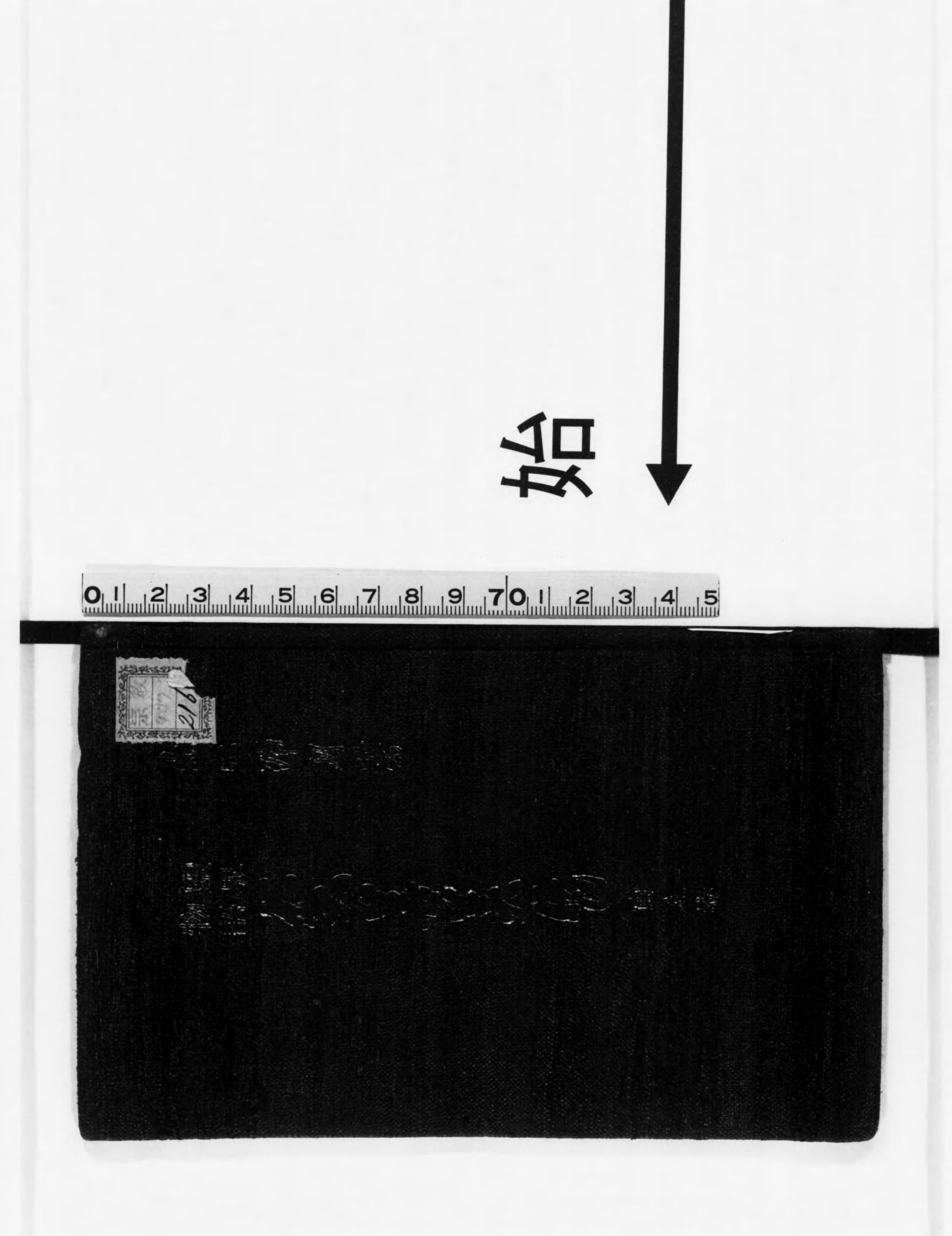
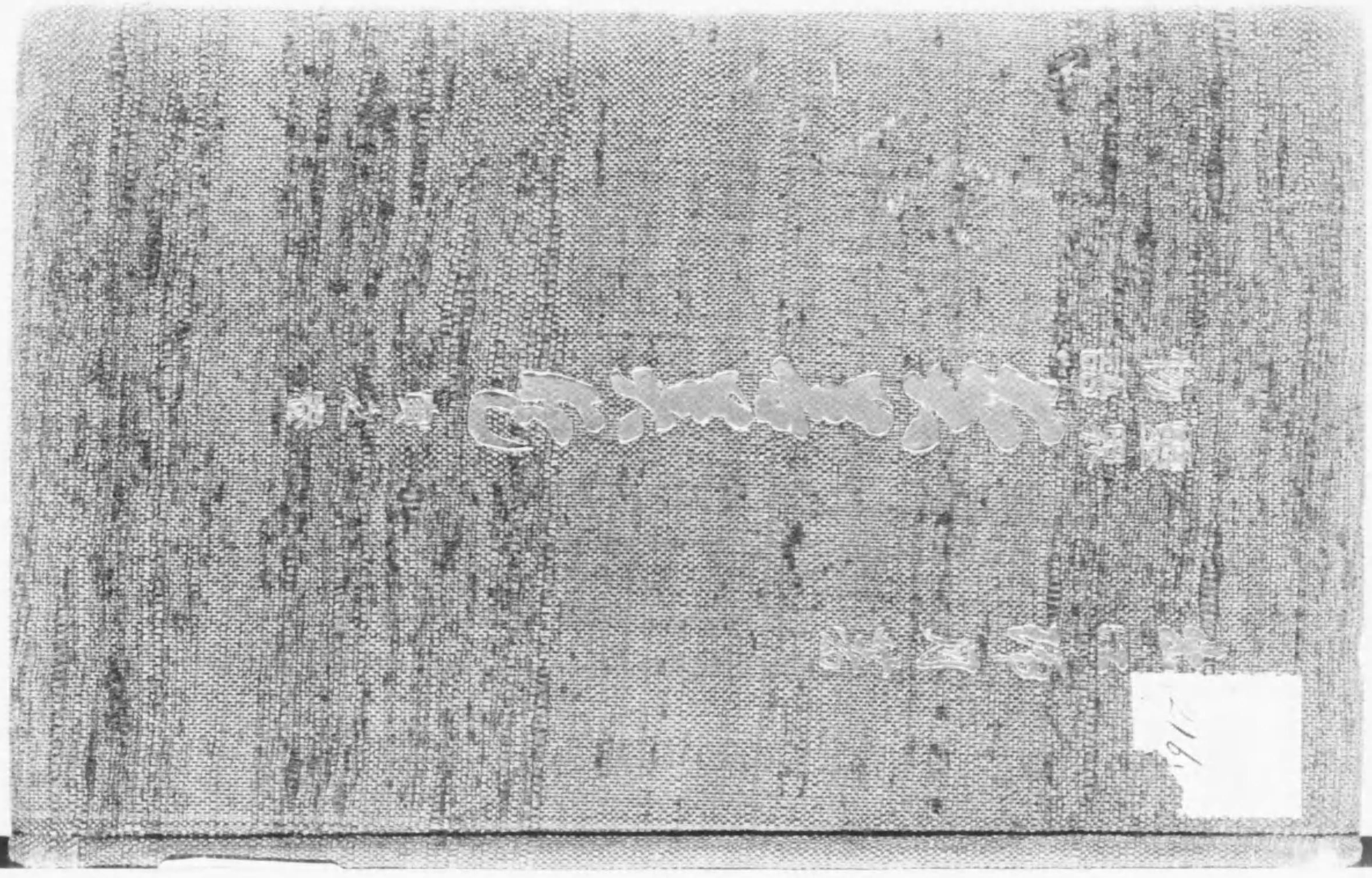

始



省務内
9.10.-8
(版出通普)

宗教
2165

特501
248

眞善美愛

寅之卷

〔靈界物語第五十一卷〕

出口瑞月口述

天聲社發行

口述者　出口聖師

東京都立
51.12.16
中央図書館

1094680

序文

この物語は凡て心理描寫的に口述してありますから、讀者の中には普通一般的の著書と比べて非常に露骨だとか、左樣なことがあらう筈がないとか云つて批評する人士が出て來るであらうと思ひます。然し靈的卽ち內的意志を基として述べたものですから、一片の虛僞も虛飾もなく、人心の奧底に入つてその眞相を究め盡し、之を神助の下に編纂したものです。上手も追從も何もありませぬ。書中高姬の物語に就ても、實に非常識極まる如く見ゆる箇所が澤山にあるでせう。併し是も亦その心底深く別け入つて、憑依せる精靈や本人の至誠心の狀態や時々變轉の有樣を描き出したものです。總ての人の心理狀態も亦高姬の如きものあることを思考して自ら戒め自ら省み、愛善の德を養ひ、信眞の光明を照らし、地獄的境域を脫出し天國の住民とし

て永遠無窮に人生の本分を守り、神明の御心に和合し以て、神政成就の太柱となり、現幽神三界のために十分の努力を勵まれむことを希望致します。口述者も目下の處にては或る事情に制せられ、實に悲境に陥りたる身ながらも、一分の時間も空費せず、心骨を苦しめつゝ、三界一般の萬靈救濟のために奉仕の誠を盡し、此物語の編纂に努力しつゝある次第であります。讀者宜しく瑞月の至誠を御諒承あつて、御研究あらむ事を願ひます。

大正十二年一月二十七日（舊十一年十二月十一日）

天城山麓湯ケ島に於て　口述者識

眞善美愛【寅の卷】(51)

目次

	頁
序文	
總說	一
第一篇　靈光照魔	
第一章　春の菊	三
第二章　怪獸策	二五
第三章　犬馬の勞	四八
第四章　乞食劇	六五

第五章　教唆……八二
第六章　舞踏怪……九八

第二篇　夢幻樓閣

第七章　曲輪玉……一一五
第八章　曲輪城……一四二
第九章　鷹宮殿……一五七
第一〇章　女異呆醜……一七一

第三篇　鷹魅艶態

第一一章　乙女の遊……一八九
第一二章　初花姫……二〇四

第一三章　餘襖……二二〇
第一四章　自惚鏡……二三六
第一五章　餅の皮……二五三

第四篇　夢狸野狸

第一六章　暗闘……二七一
第一七章　狸相撲……二八六
第一八章　糞奴使……三〇三
第一九章　偽強心……三一九
第二〇章　狸姫……三二九
第二一章　夢物語……三四三

眞善美愛【寅の巻】〔51〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　松村眞澄
加藤明子
北村隆光

總說

人間はその內分に於て至聖至美至善の天界卽ち高天原に向ひ、その外分に於ては地獄界に向つて居るものである事は、既に已に述べた處であります。故に人間は常に神の光りに背いては決してその人格を保つ事は出來ませぬ。本卷物語の主人公たる高姫が小北山の聖場に到りて、

自己に憑依せる兇靈のために誤られ、又兇靈界の妖魅なる妖幻坊に慾のために誑かされて熱狂的暴動を敢行し、神威に當てられ身を以て免れ、妖幻坊と共に怪志の森に落ち延び、妖幻坊が遺失したる曲輪の玉を、反逆者なる小北山の役員、初公、德公に命じ、文助の手より奪還せしむる場面より、浮木の森に於て妖幻坊の魔法に欺かれ種々の狂態を演ずる處より、一旦三五教に歸順したるバラモン軍のランチ、片彦將軍が、高姫の化相せる初花姫に誘惑されて苦悶の淵に沈むところより、ガリヤ、ケース、初公、德公が狸のために裸体となつて角力を取らせらる悪夢等、波瀾重疊の面白き物語であります。讀者は一片の滑稽的小說と見ることなく、意を潛めて通讀あらむことを願ひます。

大正十二年一月廿七日　於天城山麓　口述者

第一篇　靈光照魔

第一章　春の菊（一三一六）

足曳の四方の山々春めきて　冬枯れしたる梢まで
芽含みそめたる春景色　瞬き初めし陽炎の
彼方此方にキラ〳〵と　閃めき渡り天國の
御苑も今や開けむと　思ふべらなる小北山
小鳥は歌ひ胡蝶舞ひ　吹き來る風も何となく
ポヤ〳〵〳〵と肌ざはり　長閑な庭に立出でて
お菊、お千代の兩人は　咲き誇りたる白桃の
木蔭に戯れヒラ〳〵と　袖飜す胡蝶の遊び

同じ腹から生れたる　姉妹の如睦じく
互に愛し敬ひて　他所の見る目もいと清く
羨ましくぞ思はれぬ　かゝる所へ急坂を
スタ〳〵登り來る男女　雲突く許りの荒男
年増女を引連れ大門の　廣庭指して現はれぬ。
妖幻坊の李助、高姫兩人は、お菊、お千代の桃の木の下に胡蝶を追ひ、睦じげに遊び戯るゝを見て、

高姫『コレ、お前さま達二人は此お館に參拜してムるのかい』

お菊『どこの小母さまだか知らぬが、ようお參りやしたなア。サ案内して上げませう』

『案内はして貰はなくても、盲ぢやありませぬ。受付位はよく分つて居るのだから……併し私の尋ねたのは、お前は此處の信者か、但は誰か役員の娘か、それが聞きたいのだ』

『それでも小母さま、其大きな男の人、頭を括つてゐるぢやないか。私は又目でも悪いのかと思つたのよ。さう偉さうに、年老りだてら、娘をつかまへて理窟を言ふものぢやありませぬぞえ。こゝへ詣つて來る人は皆おとなしい人ばかりだよ。お前さまのやうに、いきなり口を尖らして、理窟がましい事を云ふ人は今が始めてだ。ホンにまア好かぬたらしい小母さまだこと。アタ阿呆らしい、お千代さま、放つといてやりませうかな』

千代『それでもお菊さま、こゝへお出になるお方はどんな方でも、鄭重に取扱はねばならないと、魔我彦さまが仰有つたぢやありませぬか』

『ナニッ魔我彦が、ヤッパリ此處にくすぼつてゐるよつたのだな。ドレ〳〵調べて來う。ごうせ碌な奴ア居らしようまい。こゝは日の出神の生宮に神様からお與へなさつたお館だ。

サ李助さま、私に跟いてお出でなさい』

と受付に立現はれ、高姫は横柄な顔しながら、稍輕蔑氣味な聲を出して、

『へー、御免なさい、一寸物を尋ねます。一体此處には何といふ方が大將をしてゐられますかな』

受付で切りに日の出に松を描いてをつた文助は、繪筆の手を止めて、朧げな目で少しく首をかたげ顔を覗く樣にして、

『お前さまは、どつかに聞覺えがあるやうなお聲だが、何方でムいましたかな』

『何方も此方もあるものか、義理天上日の出神の生宮の高姫ぢやぞえ。お前は文助ぢやないか。マア〳〵御壯健でお目出度う』

『ヤ、高姫樣でムいましたか。これは〳〵久振でお目にかゝります。貴女は齋苑の館へ此頃は御越しと承はり、大變な御出世を遊ばしたといふ事でムいます。ヤ、お目出度うムいます。ようマア立寄つて下さいました。そして何處へお出になります?』

『立ち寄つたのぢやない、義理天上の命令によつて、小北山の教祖として來たのだ。サアく是から何もかも、私の云ふ事を聞くのだよ』

『ハテ、妙な事を承はります。此お館は一切齋苑の館の八島主命樣の御管掌なれば、貴女樣が此處へお越しになるのなれば、前以て御通知があるべき筈になつて居ります。又此館の教主として御出で下さるのなれば、此方にもそれ相當の歡迎準備もせなくてはなりませぬが、何と又火急な事でムいますなア。教主樣の松姫樣もヨモヤ御存じはムいますまい。それでは私もかうしては居られない。御報告を申し上げねばなるまい。一寸待つて下さい。教主樣に此由を申上げて來ますから……』

『ナニ、松姫が教主こなア。あれは私の家來で、お前も知つてゐる通り、高城山をかまはして居つたのだが、彼奴は腰の弱い奴だから、お節の玉能姫に誤魔かされ、ウラナイ教を捨てゝ三五教に降參した奴だ』

『モシ高姫さま、貴女だつて、三五教の宣傳使ぢやありませぬか。貴女が率先して黒姫さまと一緒に、三五教へ改心歸順なさつたでせう。それだから松姫さまだつて、歸順遊ばすのが當然ぢやありませぬか』

『ホ、、、、そりやさうだ。併しこれは、一寸副守護神が、あんな事を云つたのだよ。此高姫は義理天上日の出神樣の、いよ〳〵身魂の因緣が分つて來ました。高天原の最奥靈國の天人樣だ。そして此高姫は稚櫻姫命の御系統、常世姫の肉宮だぞえ』

『ヤ、そんな事は、耳がタコになる程承はつて居ります。サ、何卒教主館があいて居りますから、そこで一服して下さいませ。其間にいろ〳〵の準備をせなくちやなりませぬから……エー、そして、高姫樣、貴女の後に立つてゐるのは、影法師か、但はお連れの方か、私には目が惡くつて分りませぬが、人間なら人間と仰有つて下さいませ』

『ヘン、馬鹿にしなさるな、お前さまのやうな人間とはチツと違ふのだよ。畏くも齋苑館の總務、時置師神又の名は杢助樣でゐるぞや。サ、早くお出迎へをなされ、粗忽があつては貴方のお爲になりませぬぞえ』

『それは〳〵、存ぜぬ事こて、誠に御無禮を致しました。此頃は相富に參拜者もゐいますので、斯樣な所で御話して居つてもつまりませぬ。サ、教主館へ御案内を致しませう』

妖幻『拙者は噂に高き三五教の三羽烏、杢助でゐます。以後御見知りおかれまして、宜しく御交際を願ひませう』

『ハイ、それは〳〵、自己廣告を承はりまして、尊き李助樣を拜まして戴きました。併し李助樣は三五教切つての言靈の淸らかな御方と承はりましたのに、大變なダミ聲ぢやムりませぬか。ごうも私には、失禮ながら、イー心の底から尊敬の心が起つて參りませぬ守護神が腹の中から、違ふ〳〵、と申します。もし間違ひましたら御免下さいませ』

高姫『コレ、文助、何といふ失禮千萬な事を云ふのだい、李助樣は、此頃一寸お風邪をめしてお聲が變つてゐるのだよ。お前だつて風邪ひいた時にや、滿足に祝詞もあがらぬぢやないか』

『イヤ、ごうも恐れ入りました。それなら、之から教主館へ御案內致します。何卒御神殿で御拜禮をなさつて下さいませ。其間にチヤンと座敷を片付けて用意を致しますから』

高姫は神殿に行くのが、ごこともなしに恐ろしいやうな、內兜を見すかされるやうな氣分がして氣が進まなかつた。そこで又例の詭辯を弄し始めた。

『コレ、文助さま、最前も云つた通り、義理大上日の出神は靈國の天人ぢやぞえ、祭典をしたり拜禮をしたりするのは天國の天人のする事だ。それから又お前たちのやうな八衢人間が、助け給へ救ひ給へと、祈る爲に拜禮をしたり、お祀りをするのだよ。吾々は教を傳へるのがお役だ。それ〳〵身魂の因緣性來によつて御用が違ふのだからな』

『それでも貴女、今迄は一生懸命にお祀りもなさつたり、餅も早うから御祈願を遊ばしたぢやありませぬか』

『それはきまつた事だよ。よく考へて御覽なさい。蛙の子のお玉杓子だつて、鯰の子だつて、小さい時にはヤツパリ同じ姿をして居りませうが。此高姫もお玉杓子の時は、蛙の子と同じやうに、人並に拜禮をしなくちやならぬぢやないか。けれども日日が經つと、同な

じ形のお玉杓子でも、靈の性來によつて、手が生え足が生え、糞蛙になる靈と、大きな鯰になる靈と立て別れるぢやないか。例へて言へば、お前はお玉杓子の出世した蛙だ。此高姫は鯰ぢやぞえ。鯰は地の底に居つて、尻尾をブイと掉つても、此大地がガタ〳〵〳〵と動くのだ。其因縁がハツキリと分つたのだから、今迄の高姫と同じ樣に思うて貰ふと、チツと了簡が違ひますぞや、なア杢助さま、三五教にはかう言ふ分らぬ受付が居るのですからな、困つたものですよ』

妖幻『さうだなア、ロクな男は一人も居ない。これでは三五教も駄目だ。一つお前が此處で奮發して一働きせなくちや駄目だ。オイ文助殿、これから杢助がこゝに暫らく出張して、事務を調査し監督致す、そして高姫は筆先の御用を致すによつて、何事も其命令に服從するのだぞや』

『ハイ有難う厶います。併しながら此館は變性男子樣のお筆先を以てお神徳を頂くやうになつて居りますから、もう日の出神樣のお筆先は必要がないかと心得ます』

高姫『オツホ、、、、譯の分らぬガラクタばかりぢやなア。變性男子のお筆先は餘りアラごなしで、お前達を始め、人民の腹へは入りにくいによつて、此度誠生粹の水晶靈の根本の日の出神樣が、お筆先を書いて、細かう御知らせなさる世が參りたのだぞえ、此筆先を讀まなくては、誠の五六七神政は成就致しませぬぞや』

『さうかも存じませぬが、私は松姫樣の御意見に從はねばならぬ事になつて居りますから何卒松姫さまにお會ひになつたら、貴女より詳しく其由を仰有つて下さいませ』

『成程お前としては無理もない。さうすれば之から松姫にトツクリと言ひ聞かしてやりませう、サ、兎も角館へ案内して下さい』

『承知致しました。サ、かう御出でなさいませ』

と早くも足駄をはいて、杖をつきながら、五六間より隔つてゐない庭を跨げ、蝶蝶別、お寅の住まつてゐた教主館へ案内した。

お菊は三人の姿を見て、

『コレ文助さま、そんな喧しい小母さまを、こんな所へ連れて來るのはイヤよ、大廣間へ連れて行つて鎭魂をして、四足の靈をのけて上げて下さい。何だか知らぬが、エライ物が憑いてゐますよ』

『ハ、、、、ごうも仕方のない娘さまだな。モシ〳〵高姫さま、何卒氣にして下さいますな。此方は一人娘で氣儘に育つてゐるから、人さまにあんな事を仰有るのです。何卒若い人の云つた事だから、お咎めなく許して下さいませ』

『許していらぬよ。此處は私の留守を預つて居る所だ。お母さまや魔我彦さまがお歸りになるまで、誰も入れることはならぬのだから、歸つて下さい』

『そりやさうでゐますが、此方は又特別のお方だ。お前さまがいつも、それ、憧憬して居つた、ウラナイ教の教主樣の高姫さまだぞえ。サア〳〵、叮嚀にお辭儀をして、御無禮のお詫をするのだよ』

『聞くと見るとは大違ひだネー。蝶蝶別さまも、こんな品格のない、ヤンチヤ婆アさまを可愛がつてゐたのかと思ふと、可笑しいワ、ホツホ、、、。モシ蝶蝶別さまのレコさま、生憎、來て下さつたけれど、蝶蝶別さまは不在なのよ。會ひたけりや浮木の森へ御出なさい。萬綠叢中紅一點のお民さまといふ、あたえのやうな別嬪と、手に手を取つて駈落しましたよ。そして、何時も高姫〳〵と寢言をいつたり、お酒を呑んで朝顏のチヨクを口へあ

て、これが高ちやまの口によく似てるこ云つてはキッスをしたり、うちのお母さまこ摑み合の喧嘩をしたり、鼻を捻られたり、それは〳〵面白い事だつたよ』

高姫『ナニ、蠑螈別がお民こいふ女こ駈落した？　ヤ、其奴は大變……』

こいひかけて、李助の側に居るのに氣がつき、

『ホ、、、、何こマア面白い話を聞かして貰うたものだ。高姫こいふ名は私ばかりぢやない。廣い世間には澤山あるからな、ソリヤ人違ひだ。此高姫こは違ひますぞや』

『それなら、お前は蠑螈別のお師匠さまではないのだなア。ウラナイ教の元を開いた高姫さまこは違ひますね。此小北山は今では三五教だけれど、それまではウラナイ教の神樣ばかり祀つてあつたのよ。其ウラナイ教の根本の教祖は高姫さまだこ云つて、私達も朝から晩まで、御神体を拵へてお給仕をしてゐたのよ。其高姫さまこ違ふのなら、こんな所へ來る資格はない。サア〳〵トットこ出て下さい』

妖幻『ハ、、、高姫も隨分色女だなア、蠑螈別の男つ振りを、此李助に見せびらかさうこ思つて、此處迄つれて來たのだなア。イヤもう其凄い腕前には感心致した。ヤこれで、お前の心もスッカリ分つた、高姫、これまでの緣だこ諦めてくれ、左樣なら……』

こ踵を返し歸り行かむこする氣色を見せた。高姫は慌てゝ袖を控へ、涙を流して、

『コーレ、李助さま、短氣は損氣だ、一寸待つて下さい。之には言ふにいはれぬ譯がある のだから……』

『イヤ、譯を聞くには及ばぬ、何もかもスックリこ判明致した。イヤ李助は馬鹿だつた。よくマア今まで騙つて下さつた。眉毛をよまれ、尻の毛の一本もないここまで、金毛九尾さまにぬかれて了つたかこ思へば殘念だ。千言萬語を費しての辯解も、俺には何の効能も

ない。高姫、左樣ならば……』

と袖ふり切つて行かうとする。

高姫は妖幻坊の足に確かとしがみつき、一生懸命の泣き聲を出して、

『コレ杢助さま、短氣は損氣ぢや、一通り私の云ふ事を聞いて下さい。今となつてお前さまに捨てられて、どうして五六七神政の御用が出來ませうか、義理天上日の出神がお願ひ致します』

お菊は手を拍つて、

『ホッホッホ、雪隱の水つき、婆浮きぢや、イヤ〳〵婆泣きぢや。面白い〳〵、こんな所をお千代さまに見せて上げたいのだけれどなア。お千代さま、又何處へ行つたの、まるで螺螺別さまとお母さまとの喧嘩の樣だワ、ホッホッホー』

妖幻坊はお菊の聲に、何と思うたか、後ふり返り、二歩三歩近寄つて、

『ハ、、、、子供は正直だ、面白い〳〵。コレお菊さまとやら、螺螺別の素性から高姫の關係、お前は知つとるだらうな、どうか緩りと聞かして貰ひたいものだ』

『詳しい事は知らないよ。何時も螺螺別さまとお母さまとが酒を呑んで、喧嘩ばかりしてゐたのよ、其時の話を聞いたばかりだ。高姫さまの顏を、まだ見た事がないのだから分らないワ。其高姫さまはお人が違ふと仰有つたが　口許が朝顏の盃によく似て、唇が妙に反り返り、曲線美をうまく發揮してゐるワ。ホ、、　可笑しい顏だネー、コレ小父さまお前、そんな婆アさまが好きなの、イッヒ、、、、エ、物好だねえ。ドレ是から松姫樣に面白い門立藝者が出て來て、いま一幕活劇を演じてゐる。之からが正念場だから……と云つて知らして來う、お千代さまもキッと喜ぶだらう』

と云ひながら、逃げるやうにして二百の階段を登つて行く。

文助『皆さま、何卒氣にさへて下さいますな。あの子はお寅さまの娘で、ごうにもかうにも仕方のない、俠客娘と綽名を取つてるオキャンですから、あんな子の云ふ事を耳に入れて居らうものなら、腹が立つて仕方がありませぬ。何時も受付へ出て來て、私の目が悪いのをつけ込み、首に手拭を引掛けたり、ソッと出て來て耳を引張つたり、鼻を摘んだり、熱い茶と水とをすり替へたりして、手を叩いて喜んで居る悪戯盛りだから、何卒貴方等も、廣き心に見直し聞直し、許してやつて下さいませ』

妖幻『ハ、、、、何と面白い子だなア。そんな子なら、甘く仕込んだら、すぐに改悪するだらう』

高姫『コレ杢助さま、何と云ふ事を仰有る、改悪するだらう……なんて、チッと心得なさらぬか、なぜ改善するだらうと仰有らぬのだい』

『改悪といふことは悪を改める事だ。悪を改むれば善になるぢやないか。改善といふことは善を改むる事だ。善を改むれば悪になるぢやないか』

『成程、さうすると、今迄三五教で言つてゐたのは逆樣だつたなア。ハハー、ア、それで分つた、義理天上さまが素盞嗚尊の行り方は駄目だと仰有つたのは……其事だ、流石は杢助さまは偉いわい、改悪と云つたら無上の善だ。之から一つ言靈を改めねばなるまい。流石は高姫の夫だけあつて、仰有る事が違ふワイ。ホ、、、、時置師の大神樣、イヤもう流石の義理天上も感服仕りました。コレ〳〵女助殿、お前は結構なおかげを頂きましたなア。改悪の因緣が分つたかい』

『ハイ、貴女方の仰有る事は餘り六つかしうて、文盲な吾々には、ごうも解釋が出來ませ

ぬ、何と云つても、滿樣の世の中で、惡が善に見えたり、善が惡に見えたりする世の中ですからなア、改惡……否皆目分りませぬ』

『さうだろ〳〵、お前は眼目からして分らぬのだから、皆目分らぬといふのは無理はない今までは改心といふは善い事、慢心と云ふは惡い事と思うて居つたが、ヤツパリ之も逆樣だつた。なア杢助さま、さうぢやありませぬか』

『ウンさうだ、お前の云ふ通りだ』

『何と義埋天上さまも偉いワイ。ヤ、此筆法で行けば凡ての解決がつく。三五教は善に見せてヤツパリ惡の教だつた。何もかもスカタンばかり言つて、吾々を誤魔化して居つたのだな……義理天上日の出神樣、有難うムいます……コラ金毛九尾、貴樣も其積りで、これから活動するのだぞ』

と小聲に囁いてゐる。

かゝる所へ最前のお菊は慌しく歸り來り、

『高姫さま、松姫樣に申上げましたら、大變にお喜びやして、ごうか鄭重に、お酒でも出してもてなして上げて下さい。今一寸御用の最中だから、御用濟み次第御挨拶に行きます と云つてましたよ。コレ文助さま、德さまと初さまとを呼んで來て、お酒の用意をさすのだよ』

文助『それなら、これから德と初とに御飯や御酒の準備をさせますから、一寸待つてゐて下さい』

と又ヨボ〳〵と受付さして歸り行く。

『コレ杢助さま、松姫といふのは私の弟子だから、一寸も遠慮はいりませぬよ。マ、ゆつ

くりと寛いでお酒でもあがつて下さい。お氣に入りますまいが、此義理天上がお酌をさして頂きますから、ホ、、、、餘り憎うもありますまい』

妖幻坊は俄に機嫌を直し、赤い尖つた口をあけて、

『オツホ、、、』

『何とマア。俄に尖つた口をして、アタ厭らしい。そして、赤い口だこと』

『ウツフ、、、』

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　松村眞澄錄）

第二章　怪獸策（一三一七）

初、德の兩人は種々と馳走を拵へ、酒を澤山に燗して二人の前に恭しく並べた。

初『私は此お館の新役員でムいます。魔我彦樣にお引立に預りまして、つい此間から幹部に選定されました。今迄はウラル教の信徒でムいましたが、餘り此お館にお祀りしてある神樣の御威勢が高いので、ついお參りする氣になり、信者として四五日籠つてる中、拔擢されまして、今では魔我彦樣の御用を聞いて居ります。炊事なんかするやうな地位ではムいませぬが、今日は特別を以て、文助樣の御命令により、料理法の粹を盡して拵へて參りました。どうでお口には合ひますまいが、何卒一つ召上つて下さいますやう御願ひ致しますたま〳〵のお越し故、可成山海の珍味を以て献立がしたいのでムいますが、餘り俄のお出

で材料が缺乏致し不都合でムいます』

高姫『ヤ、お前は魔我彦の家來かな、成梓、下り眉毛の、一寸面白い顏だな。之から此高姫が此處の教主だから、其積りで居つて下さい。そしてこゝの信者は幾ら程あるかな』

『ヘーお初にお目にかゝつて、顏の批評までして頂きまして、イヤもう感服致しました。まだ新任早々の事で、ハツキリは分りませぬが、トツ百ばかり、あるとか、ないとか言ふことでムいます。魔我彦さまも、この調子なら、今にバツ百人ほど殖えるだらうと申して居りました。貴女は嶮に……イ……高き、ダカ姫さまでムいますかな。ごうもよくお出で下さいました。そして立派な男樣は貴女樣の御主人でゐらせられますか、ごうも御夫婦打揃ひ、御出張下さいました段、やつがれ身に取りまして、恐悦至極に存じ奉ります』

『何と面白い男だなア、ヤ御馳走さま、これからお腹もすいたなり、一寸くたぶれたからゆつくりと頂きませう』

『私で宜しうムいますれば、一寸お酌をさして頂きませうかな、私も餘り、飲めぬ口でもムいませぬから……』

『ヤ、結構でムいます、何れ用があつたら、此鈴をふりますから來て下さい』

『承知致しました、それぢやお菊さまにお給仕をして貰ひませう』

お菊『コレ初さま、厭だよ、誰がこんな小父さまや小母さまのお給仕するものかい。私がお給仕するのは萬さまだよ。イヒヽヽ、すみませぬなア、お構ひさま』

妖幻『オイお菊こやら、此李助に一つ注いではくれまいか。お前の若い手で注いで貰ふのは、餘り氣持が惡うはない。高姫さまといふ天下一の別嬪さまがついてムるのだから可いやう

なものの、又變つたのも、此方の氣が變つていゝかも知れない』

『いやですよ、之からお千代さまと遊んで來ならぬワ、待合の酌婦ぢやあるまいし……御夫婦さま仲よう、シンネコでお樂しみ……御免よ』

と逃げるやうにして、腮を三つ四つしやくりながら、肩をあげ首をすくめ、兩手を前へバッと開き揃へ、

『イッヒ、、』

と胴までしやくつて、飛出して了つた。後に二人はイチャ〳〵言ひながら、酒を汲みかはし始めた。

高姫『コレ杢助さま、松姫だつて、文助だつて、中々さう易々と服從するものぢやありませぬよ。口先では立派な事言つて居つても、心の底は容易に歸順致しませぬよ。あのお菊だつて、中々手に合はぬぢやありませぬか、此奴は一つ、何とか工夫をせなくちやなりませぬよ』

『兎も角、あの初と德とを此處へ呼んで、酒でも飲ませ、腸までよく調べて、其上でこちらの味方を拵へておかねば、駄目だと思ふ。何程お前が義理天上だと云つても、杢助だと云つても、松姫の外、俺の顏を知つた者はないのだからな』

『ソリヤさうですな、それなら一つ、初と德を呼んで酒を飲ましてやりませうかい』

『ウン、それが可い、就いては、あのお菊も此處へよせて、酌をさせるがよからう。さうでなくちや、彼奴、一すぢ繩ではいかぬ奴だから、甘く手の中へ丸めておく必要があらうぞ』

『貴方は又、お菊に秋波を送つてゐるのですか、エーエ油斷のならぬ男だなア、それだか

ら義理天上さまが、お前を目放しするなど仰有るのだ。本當に氣のもめる男だな。私の好く人、又人が好く……こいふ事がある、こんないゝ男を夫に持つと、此高姫も氣のもめる事だワイ』

『まるで監視付だなア、高等要視察人みたいなものだ。あゝあ、こんな事なら、今までの通り、獨身生活をして居つたらよかつたに、娘の初稚姫にだつて、何だか耻しくつて、顏さへ合されもせないワ。娘ごころか犬にさへ耻しいやうだ。それだから、俺はあの犬は嫌こいふのだ』

『お前さまは、二つ目にはいぬ〳〵と仰有るが、何程いぬと云つても、綱をかけたら歸なしはせぬぞや。いぬなら歸んでみなさい。假令十萬億土の底までも探し求めて、お前さまの胸倉をグツと取り、恨をはらしますぞや』

『あゝあ、怖い事だなア。それなら今後はおとなしう御用を承はりませう。義理天上樣金毛九尾樣、今日限り改惡致しますから、お許しを願ひます、エヘ、、、』

『何なつと、いつてゐらつしやい、ごうでこんな婆アはお菊には比べものになりませぬから』

『それなら、女王樣の御命令を遵奉し、ドツと改惡致して、お菊は入れない事にし、初公と德公を、こゝへ呼んで、ドツサリ酒を飲まさうぢやないか』

次の間から、

『へー、初も德もこゝに居ります。お相手を致しませう』

こまだ呼びもせぬ先から、喉がグー〳〵いつて仕方がないので、襖をあけて、ヌツと顏を出した。

高姫『コレ、初さま、德さま、お前は最前から私達の話を聞いて居つたのだなァ』

初『ヘー、大命一下、時刻を移さず、御用に立たむと、次の間に手具脛引いて控へて居りました。イヤもうドツサリと結構なお二人樣の情話を聞かして頂き、有難いこつてムりました。あれだけ結構な話を聞かして頂いた以上は、一杯や二杯奢つて下さつても損はいきますまい。のう德公、本當に羨ましいぢやないか』

妖幻『ハ、、、、ごうも氣の利いた男だ、お前達二人は小北山に似合はぬ立派な者だ。こんな立派な役員が、吾々の來るに先立ち、おいてあるとは、全く神樣のお仕組だ。オイ、初公さま、德公さま、俺の盃を一杯うけてくれ』

初『イヤ、これは〳〵御勿体ない、お手づから頂きまして、實に光榮です、なァ德よ』

德『ウン有難いなァ、こんな事が毎日あると尙結構だがなァ』

妖幻『朝顏形の盃はないかなァ』

德『ヘー、朝顏形の盃も澤山ムいましたが、前の敎主樣が、高姫さまの唇に似てると仰有つたので、お寅さまといふ內證のレコが、悋氣して皆破つて了はれたさうで、今では一つもムいませぬ』

『フ、、、、、さうすると、此盃は敗殘の兵ばかりだな、打ちもらされし郎黨ばかりかヤ、面白い〳〵、サ、德公、一杯行かう』

『ヤ、これは〳〵誠に以て有難く頂戴いたします、酒といふものは百藥の長とかいつて、いゝものですな、かう靑々とした春の野を眺めて、一杯やる心持と云つたら本當に譬へやうがありませぬワ、ごうぞ之から貴方等御兩人の指揮命令を遵奉致しますから、可愛がつて下さいや』

『ウン、よし〳〵、併し蠑螈別と此杢助とは、どちらがお前は偉大なと思ふ』

初『ソリヤきまつて居ります。背い恰好と云ひ男振と云ひ、天地の違ひでムりますワ』

『どちらが天で、どちらが地だ』

『そこがサ、テーンと、イー私には分らぬ所です、併し、チーとばかり劣つて居りますなア』

『どちらが劣つて居るのだ』

『杢助様、言はいでも分つてるぢやありませぬか。劣つた方が劣つてるのですもの、高姫さまの前だから、何方へ團扇をあげて可いだやら、マア言はぬが花ですなア、夫婦喧嘩をたきつけるやうな事があつては誠にすみませぬから……』

『ハヽヽヽ、其奴ア面白い、マア言はぬが宜からう』

高姫『コレ初、構はないから言つておくれ、私だつて何時までも、蠑螈別さまの事なぞ思つてはゐやしないよ。あの方は大廣木正宗さまの生宮だつたが、今はサツパリ三五教へ沈没したのだから、最早普通の人格者としても認めてゐないよ。何卒蠑螈別さまのこた、言はぬよにして下さい』

初『モシ、高姫さま、こゝはウラナイ教ぢやありませぬよ、松彦さまがお出でになつてからユラリ彦さまや義理天上さま、ヘグレ神社其外、サーパリ、ガラクタ神をおつ放り出し、残らず三五教の神様と祀り替へてあるのですから、蠑螈別さまが三五教へお入りになつたのが悪い筈はないぢやありませぬか、さうすると今は貴女は三五教ぢやないのですか』

『コレ初さま、お前も野暮な事をいふものぢやない、神の奥には奥があり、表には裏があるのだ。此高姫だつて、表面は三五教になつてるけれど、矢張りウラナイ教だよ。世の中

は一通りや二通りでいくものでないから、お前も其精神で居つて下さい。これからお前等二人を李助さまの兩腕として出世をさして上げるから、さうすりや文助さまを頤でつかふやうになるよ、今に受付の命令をハイ〳〵と聞いてるやうぢや詮らぬぢやないか』

『イヤ、分りました。のう德公、貴様も贊成だらう』

德『ウーン、お前が贊成すりや、贊成しない譯にも行かぬワ、併しながら松姫さまは何うだろ、こんな事を御承知なさるだらうかなア』

初『ソリヤ高姫さまの腕にあるのだ、俺達や、只御兩人の頤使に從つて居れば可いぢやないか』

お菊は外から、窓へ顔をあて、四人の酒を飲んでゐるのを見て、あざけない聲でうたつてゐる。

『天に口あり壁に耳
お菊はソッと兩人の
一寸其處まで出て來ると
スッカリ樣子を窺へば
尖つた口をしながらも
揚句のはてが小北山
占領せむとの企みごと
うまく抱込み酒飲まし
目を晦まして義理天上
居据り泥棒をする積り
企んだ〳〵陰謀を
腹の中まで推知して
甘くゴマかし戸の外で
耳をペロ〳〵動かして
高姫さまと意茶ついた
此神殿をウマ〳〵と
初公、德公兩人を
さうして之から松姫の
日の出神の生宮と
何程高姫偉いとて

どうして〳〵松姫の　鏡のやうな魂を
曇らすことが出來ようか　そんな惡事を企むより
早く改惡するがよい　改心するにも程がある
オットドッコイこりや滝うた　さはさりながら高姫は
善をば惡と取違へ　惡をば善と確信し
改心慢心ゴチャまぜに　なさつて厶るお方故
私も一寸其流儀　臨時に使用しましたよ
コレ〳〵もうし李さまえ　蠑螈別の思ひ者
朝顔猪口の高さまえ　何程お前等兩人が
初と德とを抱込んで　うまい事をばしようとしても

忽ち陰謀露顯して　逃げていなねばならぬぞや
松姫さまがお前等の　詐り言を眞に受けて
聞かれたことが此お菊　中々承知は致さない
俠客娘と名を取つた　浮木の森のチヤキ〳〵だ
オホ、、、、オホ、、、　窓から中を眺むれば
あのマア約まらぬ顔ワイナ　イヒ、、、、イヒ、、、
李ちやま、高ちやま左樣なら　ゆつくり陰謀お企みよ
あとから〳〵此お菊　叩きつぶしてゆく程に
何だか知らぬが李さまの　姿が時々變り出し
耳の動くはまだおろか　口迄チヨイ〳〵尖り出し

鼻より高うなつてゐる　　私が一寸首ひねり
考へました結末は　　虎と獅子との混血兒
金毛九尾と御夫婦に　　なつてこゝまで小北山
貴の聖場を占領し　　朝から晩まで酒のんで
威張り散らさむ計劃か　　但はこゝに網を張り
齋苑の館へ往來する　　數多の信者を引捉へ
墮落さした上ウラナイの　　醜の教に引込んで
此世の中を泥海に　　濁らし汚すつもりだろ
何程辯解したとても　　お菊がこゝにある限り
お前の企みは駄目だぞえ　　あゝ面白い〳〵

面白うなつて來ましたよ　　妖幻坊の李助や
金毛九尾の義理天上　　鼻高姫の運の盡
松姫さまの神力と　　お千代の方の神懸
さゝき眼に睨まれて　　尻尾を出しスタ〳〵と
忽ち此場を駈出すは　　鏡にかけて見るやうだ
惡魔がそんな扮裝をして　　大日の照るのに吾々を
化かそこしても反對に　　化けが現はれ舌かんで
旭に打たれて消えるだろ　　それ故お前李助は
祠の森にゐた時ゆ　　日輪樣の照る所へ
一度も出たことないぢやないか　　たま〳〵外へ出た時は

日蔭の深き森の中　　初稚姫の伴ひし
スマートさまにやらはれて　ビリ〳〵慄うてゐただらう
お菊はチツとも知らないが　何だか知らぬが腹の中
グル〳〵〳〵と玉ころが　喉元迄もつきつめて
妙な事をば云ひますぞ　これ〳〵高姫、李さまよ
初公、德公兩人よ　胸に手をあて思案して
臍をかむよな事をすな　誠の日の出の義理天上
お菊の体をかりまして　四人の獸に氣をつける
あゝ　惟神〳〵々々　目玉飛出しましませよ
アハ、、、、、アハ、、、　オホ、、、、、オホ、、、』

と歌ひ了り、一生懸命に青葉の芽ぐむ森林の中へ脫兎の如く身を隱して了つた。

妖幻『オイ高姫、ありや氣違ひぢやないか。困つた、此處にはモノが居るぢやないか。あんな事を言はしておきや、數多の信者を迷はすかも知れない、何とかして、窘めてやらねばなるまいぞ』

高姫『本當に、仕方のない奴ですワ、松姫さまも、なぜあんな氣違ひを置いとくのだらうなアコレ初公さま、いつも、あのお菊はあんな事を言ふのかい』

初『へー、隨分誰にでもヅケ〳〵といふ女ですよ。併しながら今日みたいな惡口云つたことまだ聞きませぬな、あの女の云ふ事は、比較的正確だとの定評があります』

『定評があると云ふからには、お前達は吾々夫婦を怪しいものと觀察してゐるのかい』

『へー、別に……怪しいとは思ひませぬ、只貴方等兩人の仲は、へ、、、、チと怪しく

ないかと直覺致しました、違ひますかな』

『杢助さまと夫婦になつたのが、何が怪しいのだ。神と神との許し給うた結構な生宮だぞえ。神だとて夫婦がなければ、陰陽の水火が合はないから、天地造化の神業が成功せないぢやないか』

『ヤ、さうキツパリと承はりますれば、今後は其考へでお仕へ致します。さうすると杢助様は貴女の旦那でムいますか。よくお似合ひました夫婦でムいます。へ、、、、イヤもうお目出度う、それでは今日は御婚禮の御披露の酒とも申すべきものですな、ドツサリ頂戴致しませう。誠に御馳走さまで』

德　『オイ、初ウ、さう御禮を言ふに及ばぬぢやないか、お酒も御馳走の材料も、皆小北山の物でしたのなり、料理も俺達二人がしたのだ。そして新夫婦に、こちらから振舞つてゐるのだから、御馳走さまも何もあつたものかい、先方の方から禮を云つたら可いのだ』

高姫　『コレ、德とやら、お前の云ふ事は一應理窟があるやうだが、それは神界の事の解らぬ八衢人間の云ふ理窟だぞえ。現界の理窟は靈界には通じませぬぞや。かうして御馳走が出來るやうになつたのも、皆天上から日の出神様が御光を投げ與へ、雨露を降らして下さるお蔭で、五穀、さわもの、菜園物一切が出來てるぢやないか、其生神様にお給仕さして頂くお前は誠に結構だ。神の方から御禮申すこいふ理窟がどこにあるものかい。チツとお前も神界の勉強をしなさい、さうすりや、そんな小言は云はないやうになつて了ひますよ』

德　『へー、何とマア都合の好い教理でムいますこと』

『コレ、お前は義理天上の云ふ事が、どしても腹へ入らぬのかなア』

『へー、さう俄に入りにくうムいます。何分お酒や御飯で格納庫が充實してるますから、

今の所では餘地がムいませぬ』

『何ミマア盲ばかりだなア、そら其筈だ、靈國の天人の靈ミ、八衢人間の靈ミだから無理もない、お前さまもチツミ之から日の出神樣の筆先を讀みなさい。さうすれば三千世界の事が見えすくやうになるだらう、コレ初さまえ、お前はチツミ賢さうな顏してるが、高姫のいふ事が分つたかなア』

初『ハイ、仰せの通り、此お土の上に出來たものは皆神樣のお力でムいます。何程立派な人間でも、菜の葉一枚生み出すことは出來ませぬ、仰せ御尤もだミ考へます』

『成程、お前は偉いわい、之から杢助樣の片腕にして上げるから、ごうだ嬉しうないか、結構だらうがな。何ミいつても三五教の三羽烏の一人、時置師神樣だぞえ』

『ハイ、身に餘る光榮でムいます。オイ、德、貴樣も改心して、結構だミいはぬかい……

……否改惡して、貴女の仰有る通りだ、ミ、心は何うでもいゝ、いつておかぬかい。社交の下手な奴だなア』

德『それなら高姫樣の御說に、ドツミ改惡して贊成致します。何卒宜しう御願ひ申します』

『心からの改心でなければ駄目だぞえ。ウツフ、、、、コレ杢助さま、人民を改心さすのは高姫に限りませうがな』

妖幻坊は俄に體が震ひ出した。窓の外を一寸覗いて見るミ、猛犬が矢の如く階段を登つて、松姫館の方へ姿を隱した。高姫はアツミ一聲、ドスンミ腰を下し、目を白黑してゐる。妖幻坊も亦冷汗をズツボリかき、ガタ〳〵ミ震ひ戰くこミ益々甚しい。

（窓外白雪皚々たり　大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　松村眞澄錄）

第三章　犬馬の勞（一三一八）

松姫は各神社の拜禮を終り、吾居間に入つて神書を調べてゐた。そこへお千代は慌しく歸り來り、門口の戸をピシヤツと閉め、中からツバリをかうた。松姫は之を見て怪しみ、

『これ、お千代、夜分か何ぞの樣に、何故戸にツバリをしたり等なさるのだい』

千代『ハイ、今怪体なド倒しものが來たのですよ。何れ此處にも來るか知れませぬから、來たら入れない樣にしてゐるのですよ』

『晝の最中に戸を閉めてツバリかふ等とは可笑しいぢやありませぬか。大方晝泥棒の連中が隊を組んで來たのかい。構はぬぢやないか。こゝは神樣が厶るから、何が來たつて大丈夫だよ』

『何、お母さま、泥棒位なら一寸も構やしないが大化物が來たのだよ。今お菊さまと桃の木の下で遊んでゐたら、一人は高姫だと云つて嫌らしい顏した女、又一人は大きな男で耳がペロ〳〵動いてゐるのよ。屹度あれは化物に違ひありませぬ。お母さまをちよろまかさうと思つて來たのだらうから、屹度會つちやいけませぬよ。それで私が急いで歸つて戸を閉めたのです』

『高姫さまと云へば蠑螈別さまのお師匠樣だ。そして今は三五教の立派な宣傳使、何しに又案内もなしに突然お越しになつたのだらうか。ハテ、如何も不思議だ。昨夜も昨夜で妙な夢を見たのだが、ヒヨツとしたら化物ぢやなからうか。いや〳〵晝間に此神聖な場所へ化物がやつて來る筈がない。いや高姫さまなら會はずばなるまい。ハテ、不思議だな』

と云つて首をかたげてゐる。

千代『三五教の宣傳使の高姫さまなら、もちと品格がありさうなものですよ。それは〳〵下品な……何とも云へぬ賤しい姿で、一目見てもゾゾ毛が立つ樣な女でしたよ。そして連つてゐる男は半鐘泥棒の樣な不恰好な、怪体な面した奴ですよ。如何しても私の目には人間とは見えませぬわ。全く妖怪ですよ』

松姫『ハテ、妙な事を云ふぢやないか。そして受付の文助さまは何とか云つてゐただらうな』

『文助さまは何だか、高姫と云ふ怪体な女と話をして居りましたが、一度松姫樣に申し上げて來ると申して居りましたよ。それを聞いたものだから、文助の樣な盲が、何も分らずにお母さまに、せうもない事を云つて告げようものなら大變だと思つて、一歩先に知らしに歸つて來ましたの。お母さま、屹度あの二人に會つちやいけませぬぜ』

『それだと云つて、神樣のお道では何んな方にでも會はなけりやいかぬぢやないか。假令化物でも曲津でも、神樣の教を說き聞かして改心さしてやりさへすれば宜いぢやありませぬか』

『だつてあんな奴、何を企むか知れやしないわ。お母さまが何と云つても、お千代はあんな化物は入れませぬよ』

『マア何事も私に任しておきなさい。お前さまは未だ子供だから、さう一つ〳〵嘴を容れるものぢやありませぬぞや』

斯く親子が話してゐる處へ、門口の戸をボン〳〵と叩く音がする。之は受付の文助が高姫の來た事を松姫に報告のためであつた。

文助は戸の外から、

『もし〳〵、松姫樣、文助でムります。一寸門口を開けて下さいませぬか。急用がムりま

して御相談に參りました』

『ハイ、一寸待つて下さいませ。子供が惡戯致しまして……今直開けますから……これお千代、早く門を開けぬかいな』

『お母さま、門を開けたら文助が這入つて來ますよ』

『這入つてムる樣に開けるのぢやないか』

『だつてお母さま、文助の云ふ事に卷込まれちやいけませぬよ。あの爺は化物にひごう感心してゐた樣ですから……』

と云ひながらツツバリを取外しガラリと開けた。文助はヨボ〳〵こしながら閾を跨げ、四邊をキョロ〳〵見廻してゐる。されど松姫の姿はハッキリ見えなかつた。只目が惡いので、聲をしるべに話するより仕方がないのである。松姫は、

『さア何卒お上りなさいませ』

と座蒲團を出し文助の手を取つて坐らせた。

文助『アーア、年が寄つて目が不自由なのも厄介なものですわい』

『それだつて貴方は心眼が開けてゐるのですもの、結構ですわ。目が見えないと云つてもあれ位な綿密な繪が書けるから結構ぢやありませぬか。時に文助さま、何か急用でも出來たのでムりますか』

『ハイ、折入つて貴女と御相談を申し上げたい事が突發致しました。實にお氣の毒で……何から云つてよいやら、地異天變、言葉の出しやうもムりませぬ』

お千代は側から、

『これ文助さま、駄目よ。彼奴ア化物だから、お前が騙されて居るのだ。お母さまに何も

言ふぢやありませぬよ。さア〳〵トツトこお歸り。足許が危なけりや、お千代が手を曳いて上げませう』

松姫『これお千代、何こ云ふ事を仰有るのだい。お前は子供だから默つて居りなさい。文助さま、こらへて下さいや。如何も此の子は教育が出來て居ないから困つたものです。お菊さまこ好一對です。遊ぶ友達が惡いこサツパリ感化されて了ひます。本當に親も迷惑してるますのよ。時に文助さま、お氣の毒だこは何事ですか』

『ハイ、實は高姫さまが見えましてゐります。そして齋苑の館の總務李助樣までがおいでになり、何者か貴女の惡口を申したものこ見えて、貴女は今日限り教主の役を解き、高姫樣が教主こなり、李助樣が出張して監督をなさる事になつたのだこ云つて、今下に見えて居ります。誠に長らくお世話になりましたが、貴女樣こお別れせなくちやならぬかこ思へば實にお名殘惜しうゐります』

松姫は平然こして、

『ホ、、、、、何か大變事が起つたかこ思へば、そんな事ですかな。そりや結構です。妾も實は此處を立退いて、夫こ共に大活動をして見たかつたのです。併しながら已むを得ず今日まで勤めて居りました。そりや本當に結構ですわ』

『それを聞いて私も一寸安心致しました。いや如何も上のお方の心こ云ふものは分らぬものですな。さうなくちやかなひますまい。櫻は夜の嵐にうたれて一つも殘らず潔く散るのが譽だこ聞きました。イヤ天晴々々、見上げたお志、實に感じ入りました』

こ袖に涙を拭うてゐる。お千代は側から、

『これ、文助さま、お前は盲だから化物に騙されてゐるのだよ。お母さまでが、何です

か。あんな奴が來たと云つて此處を飛び出す積りですか。未だ齋苑の館から何ども御沙汰がないぢやありませぬか。假令何んな方が見えても相手になつちやいけませぬよ。此間もお寅さまが魔我彦を連れて行かれてから、もう四五十日になるのに、何の沙汰もないぢやありませぬか。同じ齋苑の館から見えるのだから、八島主の神樣から御内報がある筈、又魔我彦さまからも何ども知らせがある筈です。先づトックリと調べた上でないと、えらい目に遭はされますよ』

松姫『いかにもさうだな。お前の云ふのも一理がある。いや文助さま、何か其高姫さまは齋苑の館から辭令でも持つて來てゐるか。それとも教主樣か魔我彦さまの手紙でも御所持か、それを聞いて來て下さいな』

『ハイ、聞いて參りませうが、何を云つても三羽烏の一人時置師の神樣が御出張になつてゐるのだから、尋ねるにも及びますまい。外の方なら兎に角、何ど云つても齋苑の館の總務さまだから、尋ねない方が宜いでせう』

千代『これ文助さま、お前がよう尋ねにや私が之から行つて、本眞物か、僞物か、檢査をして來ますわ。お母さま、それで宜いでせう』

『これ〳〵お千代、何を云ふのだ。お前は今日は何にも云つちやなりませぬぞや。母が箝口令を布きますぞや』

『だつて千騎一騎の此場合、お母さまの箝口令位で閉口出來ますか』

文助『困つた事が出來たものだな』

『あゝ困つたお母さまだな』

『あゝ困つた娘だな』

千代『ハッハ、、、』

と笑ふ聲を外から聞きつけて這入つて來たのはお菊であつた。

『お千代さま、何が可笑しいの、よく笑つてゐますね』

『お菊さまか、よう來て下さいました。今ね、文助さまが出て來て、あの化物を杢助さまだ、高姫さまだと云つてゐますのよ。それをお母さまが本當にしてるのだもの、可笑しうて堪らないわ』

『本當にね。怪体な奴が來たものですわ。私い高姫と云つたら、もつと立派な小母さまと思つてゐたのに、まるで化物だわ。杢助さまだと云つてるが獸の樣に耳がペロ〳〵時々動くのだもの。何でも彼奴ア可笑しい化さまですよ。然しあの婆が「私は高姫だ、松姫さまの師匠だから早く呼んで來い」と云つたので仕方なしに來たのよ。もし松姫さま、あんな奴に會つちやいけませぬよ。然し何とか返事をせなくちやなりませぬから、一寸御報告旁やつて來ましたの』

松姫『それは、まアよう來て下さつた。お菊さま、お前怪しいと思つたのかい』

『如何も可笑しい奴ですわ。キット、ありや贋ですよ』

『お菊さま、それなら貴女御苦勞だが、その高姫さまとやらに斯う云つて下さいね、「今松姫は神樣の御用の最中だから、濟み次第お目にかゝります。それまで教主館で、お酒なつと飲つて待つて居て下さい」と私が云つたと傳へて下さいね。文助さまも一緒に歸つて下さい。そして粗忽のない樣にもてなしを賴みますよ』

文助『ハイ、承知致しました。サアお菊さま、歸りませう』

とお菊に手を曳かれコチ〳〵と階段を下つて行く。後にお千代は聲を潜めて、

『お母さま、高姫は本當のよ。けれど後からついて來た杢助と云ふのは屹度化物よ。その積りでつき合はなくちやいけませぬよ』

『そんな事、どうしてお前に分つたのかい』

『それでも、私の耳許でエンゼルが囁いて下さいましたもの。お母さまによく氣をつける樣にと云はれましたよ』

『お前は時々エンゼルの御降臨があるのだから本當に重寶な體ね。そして其化物は何物だと仰有つたかい』

『あれは妖幻坊と云ふ兇黨界の相當の位地を占めてる大惡魔ださうです。然し日輪樣を恐れる事が非常なもので、晝歩く時は深編笠を被り、中々外へは出ないさうですよ。晝間は何時も森の中で寢てると云ふ事ですわ。その妖幻坊に高姫さまが化かされて、又義理天上をふり廻してゐるのだから尙々始末が惡いのよ』

『ハテ、困つた事だな。何とか工夫があるまいかな』

『お母さま、屹度會つちやいけませぬよ。そして高姫は自分勝手に、此處の敎主だと云つてるのですよ。齋苑の館からお沙汰のあるまで動いちやいけませぬぞえ。お母さまは小北山の神司だから、誰に指一本さへられる體ぢやありませぬからね。屹度調べて見たら、齋苑の館の書付は持つてゐない事はきまつてゐますわ。それで面白いから、一遍調べてやらうと思つたのよ』

『そんな要らぬ事をせなくてもいゝぢやないか。高姫さまに耻をかゝさない樣にして、なるべく御改心を遊ばす樣に眞心を盡して御意見を申上げるのだな。お前も出過ぎた事は云はない樣にして下さいや』

『それでも餘り馬鹿にしてゐるのだもの。ちつとは言ひたくなつて來るのよ。一遍神樣を拜ましてやつたら吃驚するだらうね。それを見るのが樂しみだわ』

『何とまア口の惡い子だな。人がビックリするのが、お前はそれ程面白いのかい。困つたお轉婆だな』

『それでも世の中を誑かし人を苦しめ、大神樣の道を妨害する惡魔だから、チツとは懲しめてやらなくちや、神樣にお仕へしてゐるお母さまの役も濟みますまい。私だつて化物を看過しちや職務不忠實と云ふものですわ。こんな時こそは審神を充分しなくちやなりませぬわ』

『併し高姫さまは本物だとあれば、私の大恩ある御師匠樣、お目にかゝつて御挨拶を申上げねばなるまい。そして其樣な惡魔に騙されて居りなさるなら、氣をつけて上げなくちや師弟の役が濟むまい。あゝ困つた事が出來たものだ』

斯く話す所へ尾をふつて潔く這入つて來たのは巨大なる猛犬であつた。見れば首たまに何か手紙の樣なものが下つて居る。

松姫『ア、これは何處からか手紙を持つてお使ひに來たのだな。これ〳〵お犬さま、何處からか知らぬが御苦勞だつたな。ぢれ〳〵お手紙を見せて頂きませう』

こやさしく云ひながら二つ三つ首の邊りを撫でて可愛がり、括りつけた手紙を取り、上書を見れば、「小北山の神司松姫樣へ、祠の森に於て、初稚姫より」と記してある。

『あゝ之は初稚姫樣の御手紙だ。何か變つた事が出來たのかな。これお千代や、一寸門口を閉めて下さい。秘密の御用かも知れないから』

お千代は外をキヨロ〳〵見廻し、誰も出て來ないので安心の胸を撫で下し、ソツと戸をしめ

て堅くツッパリをかうた。此猛犬は云はずと知れた初稚姫の愛犬スマートなる事は云ふまでもない。

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　北村隆光錄）

瑞月

未決監にて

時ならぬ寒さ一夜に襲ひ來て
おごろかされぬ長月の空を
遠近の敎の御子の赤心を
籠めし玉章讀みつゝ嬉しき

第四章　乞食劇（一三一九）

松姫は靜に封を押切り押戴いて讀み行く。おひ〳〵と顏色變り兩手は慄ひ、容易ならざる文面の如く思はれた。そして松姫は手紙を讀み了りホッと溜息をついた。

千代『お母さま、私の云つた事違やしますまいがな。高姫は齋苑の館からの命令ぢやありますまい。そしてあの杢助と云つてるのは化物でせうがな。此犬は初稚姫樣の愛犬でスマートと書いてありませう』

『あゝあ、油斷のならぬ魔の世界だな。こりや斯うしては居られますまい。併しながら初稚姫樣の仰せ、何處までも善一つで高姫樣を改心させにやならぬ。然し初稚姫樣のお言葉に……お前は小北山の神司だから、何處までも此處を動いてはいかぬ……と書いてある。

もしも高姫さまが何處までも此處の教主と頑張つたら、何うしようかな。せめて魔我彦さまでも居つてくれたら、何とかいゝ相談が出來るだらうに、困つた事だ』

『お母さま、決して心配要りませぬ。どうせ一度はお宮さまを巡拜するでせうから、上のお宮のお扉を開いたら、屹度ビックリして逃げるでせうよ。エンゼルさまが私にさう仰有いました』

『あゝさうかな。何卒まア都合よくやりたいものだ。然しお前も此スマートさまを連れて高姫さまの目にかゝらぬ處へ暫らく遊びに行つて來て下さい。お前が居ると都合が悪いからな』

『それなら、お母さま確りなさいませや。何卒卷き込まれぬ樣になさいませ。これ、スマートさま、お前は可愛い犬ね』

と云ひながら首たまに抱付いた。スマートは薄い平たい舌でお千代の頰をペラッと舐めた。お千代はビックリしてスマートを庭に押し倒した。スマートは仰向に轉けたまゝ呑氣な風で足で空をかいて居る。

『ア、此犬は牝だわ。さアおスマちやま、お千代と春先でもあり、陽氣がいゝから、林の中へ行つて遊んで來ませう。兎でも居つたら脅してやりませうね』

と云ひながら頭を撫でる。スマートはムックと起き上り、お千代の後について山林の中へ遊びに行く。後に松姫は只一人手を組んで思案にくれてゐた。

『あゝあ、高姫さまは困つた方だな。どうしたら本當の御改心が出來るのだらう。初稚姫樣の御手紙によれば、此頃はスッカリ精神亂れ、金毛九尾の惡狐や蟇や蛇や狸、鼬等の無料合宿所になつてゐられるとの事、それに又杢助と名告つてるのは、初稚姫樣のお父さま

でなくて大雲山の妖幻坊だとか、ほんとにいやらしい化物をつれて、夫婦氣取りで、こんな處に出て來て松姫を追ひ出し、自分が教主にならうとは、どうした事だらう。私は別に此處の神司に執着心はないのだけど、惡神にみす〳〵此處を開け渡して出る譯にも行かない。そんな事しては神樣にも濟まない。こゝは何處までも孤軍奮闘の覺悟でなければならない。あゝ國治立大神樣、豐國姫大神樣、木花姫大神樣、金勝要大神樣、守り給へ幸へ給へ、惟神靈幸倍坐世々〳〵』

と一生懸命に祈つてゐる。

そこへバラ〳〵とやつて來たのは初、德の兩人であつた。足許もヨロ〳〵しながら兩人は、

『松姫さま、エー、一寸御報告に來ましたが、三五教の宣傳使、ウラナイ教の元の教祖高姫さまがお越しになつて居ります。そして松姫は何故私が來てゐるのが分つてゐるのに挨拶に來ないのか。御用が濟んだら出て來ると云つておきながら、まだ出て來ないと云つて大變な立腹でムります。そして此館は今日から高姫が教主だ。李助樣が監督に來たのだとそれは〳〵えらい御權幕でムりますよ。早く御挨拶においで下さいませぬと、貴女のお身の上に關した一大事が出來致しますから、ソツと御注意に參りました』

『假令高姫さまが此處の教主になられようが、事務を引繼がぬ間は此處は松姫の管轄權内にあるのだから、折角伺ふと云つたけど、私の方からよう伺はないから、高姫さまと李助さまに、此方へ出て來て貰つて下さい。それが至當だからな』

初『松姫さま、何とえらい勢ですな。泣く子と地頭とには勝たれないと云つて、そこは貴女の方から折れてかゝりなさるがお得かも知れませぬよ。きつと惡い事は申しませぬ。貴女も足掛け首掛け四年振此處にムつたのだから、今日俄に立退き命令を下されては面白う

ムりますまい。それは私もお察し申して居ります。併しながら、これも因緣だと諦めて、素直に高姫さまや杢助さまに御面會をなさるが宜しい。そしたら又何とか貴女の都合のいゝやう取計らつて下さるでせうからな』

『何と云つても、そんな理由はありませぬから、高姫さまに私交上としては私の師匠だから濟まないが、公の道から行けば私は此處の神司、何の遠慮もありませぬから、何卒私の職務として調べたい事がある。よつて直樣御兩人に此方へ來て下さる樣に傳達して下さい』

『それでも大變な權幕で、動きさうにやムりませぬ。そんな事をお傳へしようものなら、私は折角杢助さまの片腕になつた職務まで剝奪されて了ひます。のう德よ、さうぢやないか』

德　『ウン』

松姫　『これ、初さま、お前さまは杢助さまの片腕になつたと今云ひましたね』

初　『ハイ、確に申しました。新教主高姫殿の夫杢助、又の御名は時置師の神、齋苑の館の總務を遊ばす杢助樣の兩腕と兩人がなつたのだから、凡ての宣傳使を頭で使ふ初さま、德さまですよ。如何に松姫さまだつて、もう斯うなつた上は此初さま、德さまの命令を聞かずには居られますまい。如何でムる。返答承はりませう』

『ホ、、、、、愈三助人形か痩バツタの樣なスタイルをして、よくも威張つたものだね。お前さまは杢助さまの兩腕になつたか知らないが、此處に居る間は此松姫の命令を聞かなくちやなりますまい。魔我彦からお役目解除の辭令でも受けた上、杢助さまの推薦によつて、八島主さまから立派な辭令を頂いて來なくちや駄目ですよ。そんな夢なんか、いゝ加

滅にお覺ましなさるが宜からうぞや』

『何と云つても駄目ですよ。現に李助樣の口から仰有つたのですもの。そして高姫さまが證據人ですもの。ヘン、之が違ひつこはありませぬわい、のう德公』

と初公は、

『ウン〳〵〳〵』

と拳を握り反身となり、稍酒氣を帶びし事とて、高慢面をして得意氣に雄猛びして見せた。松姫はあまりの可笑しさに吹き出し、

『ホ、、、、』

と笑ひ轉けた。初公は大いに怒り、

『こりや、松姫、無禮千萬な、勿体なくも總務の片腕と聞えたる、齋苑の館の二の番頭さまだ。某の面体を見て笑ふと云ふ事があるものか。いや輕蔑致すと云ふ事があるか。公私本末、自他の區別を知らねば決して神司たる事は出來ませぬぞ。實の所は李助さまが、お酒の上ではあるが、私等に全權を任すから松姫をボツ拂へとの仰せ、さア初公の言葉は李助の言葉だ。さア尻を紮げてトットと出て行け。猶豫に及ばゝ了簡致さぬぞや』

『ウッフ、、、あのまア、乞食芝居が上手なこと。さア一文あげるから歸んで下さい。もう澤山拜見致しました』

『愈以て怪しからぬ事を申す。松姫の阿女奴、さア只今限り事務を引渡しトットと出て失せう。最早其方は小北山には何一つ用もなければ權利もない。おい德公、貴樣は高姫樣の代理ぢやないか。何故默つてゐるか』

德公は高姫氣分になり、肩を搖り首をふり婆聲を出して、

『これ松姫さま、私は高姫の代理ぢやぞえ。長らく御苦勞でムりました。併しながら今日迄お前さまは神樣の御都合で御用をさせてあつたのだ。然し上義姫はもう此處に用事はない。之から義理天上日の出神が此處を構ふによつて、お前はトツトと出て行つて下さい。それとも十分改悪して、杢助や高姫の云ふ事を聞くなら、炊事場のおサンどんに使つて上げぬ事もない。然しお前も此處に住み慣れて來たのだから、此處を追ひ出されるのは殘念だらう。それは高姫もよく分つてる。それでお前さまは、どんと、かばちを下げて炊事の御用か雪隱の掃除をなさいませ。そこまで苦勞をなさらぬと、今から偉さうに教主だなんて威張つて居ると、猿も木からバツサリ落ちる例もありますぞや。サア〳〵、返答々々、如何でムる。高姫の代理が此處でキツパリと承りませう。さても〳〵殘念さうなお顏だな。他人の俺でさへ涙が零れませぬわい。アーン、アーン〳〵〳〵アハ、、、、、泣くのか笑ふのか、いやもう譯が分りませぬ。松姫さまの事を思へば泣きたくなり、高姫さまの事は思へば笑ひたくなる。悲しい事と嬉しい事と一度になつて來た。親の死んだ處へ花嫁が出て來た樣な心持だ。悲喜交々相混り苦樂一度に到來す。上る人と下る人、ほんに浮世は儘ならぬものだな。アッハ、、、「アーン〳〵〳〵オーン〳〵〳〵如何しようぞいな一〳〵。此行先はお千代を連れて袖乞ひ、物貰ひに歩かにやならぬと思や、俺は胸が引裂けるやうに思ふワイのー……（義太夫）之と云ふのも前の世で、如何なる事の罪せしか悲しさ辛さ、身も世もあられぬ憂き思ひ、エ、ヘ、、、ンエーーーー、如何しようぞいなー」エーエ、到頭俺の體に松姫さまの副守護神がのり憑りやがつて、泣いたり笑つたり、いやもううつり易い水晶魂は斯んなに苦しいものかなア。のう初公、俺等もヤツパリ春が來たぢやないか。此好機を逸して何時の日か、出世の時を得むやだ。おい、有力なる後援

者が出來たのだから、チツとは無理でも氣の毒でも、奴隷的道德は廢めにして權利義務を主張し、自分の位地を高めるのが一等だぞ。のう初公、確りやつてくれ。俺も今度は大車輪だから、イツヒ、、、、』

『ホ、、、、、あのまアお二人さま、揃ひも揃うて、何時の間に、そんな芝居を覺えて來たの。犬が笑ひますよ』

初『こりや、松姫、何處までも教主面をさげやがつて、俺達二人を何と心得てる。無禮ぢやないか。左樣な失禮なことを申すと、此儘には差許さぬぞ』

德『こーりや松姫、何と心得てる。今迄の德さまや初さまとはチツと値段が違ふのだ。エー俄仕入のバチ者とは違つて上等舶來品だ。あまり見違へを致して貰はうまいかい』

『ホ、、、、、虎の威をかる糞喰ひ狐とはお前達の事だよ。もう斯うなつちや松姫も了簡なりませぬ。さア今日只今から暇をつかはすによつてお歸りなさい。一分間も此聖場にはお前の樣な薄情者置く事は出來ませぬ』

初『ヘン、馬鹿にすない。もう此小北山は貴樣の權利ぢやないぞ。勿体なくも李助樣の御監督の許に高姫樣の御管轄區域だ。お前の方から暇を貰ふよりも、此方の方から暇をくれてやるのだ。有難く思へ。さア〳〵出て行かう〳〵。グヅ〳〵して居ると邪魔になるわい』

德『おい、こんな分らぬ女に何時まで掛合つた所が駄目だ。李助さまがやつつけて了へと仰有つたぢやないか。おい、やつつけろ〳〵』

『よし來た』

と二人は仁王立となり、松姫を中に置いて、今や拳骨を固めて飛鳥の如く飛びかゝらむとしてゐる。松姫は泰然自若として少しも驚がず、二人の目を見つめてゐる。兩人は打掛らうとすれ

ども、何故か、松姫の身体から光が出る様に思はれて、目が眩み飛びつく事が出來ない、松姫は心靜かに歌を歌つてゐる。

『虎の威をかる古狐　小北の山に現はれて
松姫館に侵入し　無道の難題吹きかけて
卑怯未練に兩人が　嚇し文句を並べ立て
木偶坊の樣なその姿で　握り拳を固めつゝ
慄ひゐるこそ可笑しけれ　初公、德公よく聞けよ
李助司と名告りゐる　彼は誠の人でない
大雲山に蟠まる　八岐大蛇の片腕と
兇黨界にて幅利かす　妖幻坊の曲津ぞや

高姫司は戀淵に　知らず〳〵に陷りて
妖怪變化と知らずして　李助司と思ひつめ
得意になつて今此處に　夫婦氣取りで來たなれど
決して誠の三五の　八島の主のお言葉に
從ひ來りしものでない　これの館を奪はむと
曲津の神に唆られて　惡逆無道の企みをば
敢行せむとするものぞ　汝等二人は曲神に
魂をぬかれて目が眩み　名利の慾に迷ひつゝ
見るに堪へざる狂態を　演ずるものぞ、いと惜しや
早く心を改めて　此松姫が言の葉を

完全に委曲に聞くがよい　早目を覺ませ〳〵
神は汝と倶にあり　汝も神の子神の宮
惠みの光に照されて　正しき神の御子となり
吾に犯せし罪科を　此場で直に悔悟せば
許してやらむ惟神　神に誓ひて兩人に
完全に委曲に宣り傳ふ　あゝ惟神〳〵々々
御靈幸はひましませよ』

と歌ひ終るや、兩人は兩眼より涙をハラ〳〵と流した。そして少しく首を動かし改心の意を表した。松姫は忽ち靈縛を解いた。二人は身体もとの如くになり、パタ〳〵と表へ駆け出した。果して彼等兩人は改心したであらうか。但は再び悪意を起して、松姫に對し如何なる危害を與へむとするであらうか。後節に於て審らかになるであらう。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　北村隆光録）

未決監にて　瑞月

世につれぬ月の光も甲子の
　文月の十二夜曇りてしかな

甲子の文月十二の月みれば
　下界のために憂ひ顔なる

第五章　教

唆（一三二〇）

妖幻坊、高姫はイチャ〳〵云ひながら酒を汲み交はし、へべレケになつた妖幻坊の無理をなだめながら、初公、徳公の兩人が返答如何にと心待ちに待つて居た。そこへスタ〳〵と青い顔して歸つて來たのは、初公、徳公の兩人であつた。高姫は目敏く之を見て、

『オイ兩人、えらい暇が要つたぢやないか、どうだつたな。松姫はウンと云つただらう』

初『ヘイ、イヤもう何でムいました。それは〳〵偉いものですなア、本當に一寸手に合ひませぬわ』

『手に合はぬとは、松姫が義理天上の申す事を聞かないと云ふのかえ』

『オイ徳、貴樣は高姫さまの代理ぢやないか、お前代つて報告して呉れ』

徳『エ、高姫樣、貴女の御命令によつて種々と申しました所、松姫の奴、金毛九尾がのり憑つて居るのか、それは〳〵偉い勢で、到底吾々の云つた位ではかてつけませぬがな』

『かてつかぬとはどうしたと云ふのだえ。つまり高姫の云ふ事は聞かないと云ふのかえ』

『ハイ、聞かないとも申しませぬが、お前さまにはいろ〳〵のものが雜居してゐるさうですよ。さうして杢助さまは大雲山の妖幻坊と云ふ妖怪だといつて居ましたよ。何とかして追つぽり出す積りだと意氣込んで居りましたよ』

『何と、杢助樣を妖幻坊だと、いよ〳〵もつて怪しからぬ。松姫の奴、グヅ〳〵して居るとぢんな事を申すか分つたものぢやない。これ杢助さま、起きなさらぬかいな。お前樣を本當の杢助ぢやない、化州だと云つて居るさうですよ』

妖幻『ハ、、、、、化物と云つたか、さうであらう。變性女子の瑞の御靈でさへも大化物と云ヅ

はれて居るのだから、俺も化物と云はれるやうになれば光榮だ。高姫喜べ、これでもつて俺の人物の偉大崇高なる事が分るだらう、アハ、、、、』

初『それでも化物と松姫の云つたのは、そんな意味ではありますまいぜ、貴方は何でも大雲山の妖幻坊だとか云つて居ましたよ』

『怪しからぬ奴だ、さう云ふ事を云はして置いては、吾々の目的の邪魔になる。こりや何とか致さねばなるまい。俺が行つて取り挫いでやるのは容易い事だが、それでは餘り大人氣ない。オイ初、德、俺の最前言つたやうに思ひ切つてやつつけろ。お前達も俺の兩腕となつた以上は、今が手柄の仕所だ』

初『ヘエ、エ、やつつけますが、それがそれ中々の強かものでげして、實はその、エー何でげす』

と頭をガシ〳〵掻いて居る。

高姫『コレみつともない。松姫にやられて來たのだな。時に杢助さま、やつつけろと仰有つたが、滅多に手荒い事をなさるのぢやありますまいな。松姫は私の弟子ですよ。何程反對致しても、私は彼奴を構うてやらねばなりませぬ』

妖幻『何と高姫さま、貴女は慈善家ぢやなア。ヤ、感心々々、それなら何故、珍彦に毒酸を盛つたり、虬の血を盛つた盃を與へたのだ。やつぱり奥には奥があるのかなア、アハ、、、』

『これ初さま、德さま、きつと手荒い事をしてはなりませぬよ。併し正當防衛は此限りにあらずだから、ごうか杢助さまのお言葉に從つて一働きして下さいな』

『ヘエ私は何でも致しますが、この德の奴が臆病ですから、氣を取られて思ふやうに働け

ませぬわ』

妖幻『それならお前一人行つてやつて來たらどうだ。多寡が女の一匹ぢやないか。それ位の事が出來なくて、大望な御用が出來るか』

『私一人では、どうも都合が悪いぢやありませぬか、よう考へて御覽なさい。貴方の兩腕ぢやありませぬか、片腕では飯喰ふ事も、針仕事一つする事も出來ませぬだらう。それだから、どうしても德を邪魔になつても連れて行かなくちや都合が悪いですな』

德『馬鹿を云ふな、貴樣が一番がけに靈縛にかゝつてふん伸びたぢやないか』

『ふん伸びたのは貴樣も同然だ、偉さうに云ふない』

『それでも第一着に貴樣がふん伸びたのだ。俺はおつき合にふん伸びて居たのだ。餘程松姫が怖ろしいと見えるのう。そんな事で俺の上役にはなれぬぞ。サアどうだ、茲で彼奴を倒した方が上役にして頂くと云ふ事を御兩人樣の前で願はうぢやないか』

妖幻『アハ、、、、そりやさうだ、手柄があつた方が上役になるのは當前だよ、ちやんと草鞋でもはいて足裝束をし、身動きのし易いやうにして行くのだ』

『ハイ畏まりました』

と兩人は、慌しく納屋に入り、喧嘩裝束に身を固め、樫の棍棒を携へて松姫館に進むべく準備に取り掛つた。妖幻坊、高姫は以前の如く、ひそ〳〵何事か囁きながら飲酒に耽つて居る。

お千代はスマートと共に躑躅の花なぞをちぎり戯れながら、向ふの谷の森林に何時とはなしに進み入つた。スマートは何とはなしに俄に體を慄はせ、遂にはお千代の袖を銜へて引つ張り出した。お千代は驚いて、

『これスマートや、何をするのだい。ちつと温順しうおしんか』

こびしやつこ横面をはる、其處へ慌しく走つて來たのはお菊であつた。お菊はハア〳〵こ息を喘ませ、お千代の此處に居るのを見てやつこ安心したらしく、

『お千代さま、貴女此處に居たの、私此處まで逃げて來たのよ。あの李助こ云ふ奴化物だわ。さうして此館を横領しようこ考へて居る太い奴だから、すつかり素破抜いてやつて、此處まで逃げて來たの。きつこ怒つて追駈けて來るに違ひないこ思つたからねえ、本當に困つた奴が來たものだわ。そしてその犬は何處から來たの』

『これはスマートこ云つて、初稚姫さまの愛犬だこ云ふ事よ。ぞここもなしに賢い犬よ』

『こりやスマートさま、よう來て下さつたねえ。何さうお前は騒ぐの、些こ靜にしなさらぬか』

こ頭を撫でる。スマートは益々落付かぬ風情をする。

千代『どうも不思議だわ、大方お母さまの身の上に何か變つた事が出來たのぢやあるまいか。俄に胸騒ぎがして來ましたわよ』

お菊『あの化物奴、お母さまを噛ひに行きよつたのか知れませぬ。それでスマートが、こんなに騒ぐのでせう、お千代さま、其綱を解いておやり』

お千代は、

『さうねえ』

こ云ひながら松の株に繋いだ綱を解いた。スマートは一目散に、細くなつて谷を越え姿を隱した。

千代『何こまア早い犬だ事、もう姿が見えなくなつて仕舞つたわ。お菊さま、私氣に掛るから一寸歸つて見ますわ。お前さまもそこまで來て下さいな』

『ハイお供致しませう。若しも化物が暴れて居つたら何うしませうかねえ』

『サア、神様をお願ひして助けて貰ふより仕方がありませぬわ』

こんな事を話し合ひながら、覺束ない足許で小柴を分け、松姫館をさして歸り行く。

さて松姫は唯一人戸を閉め切つて神殿に向ひ、いろ〳〵と取るべき目下の方針について神示を伺つて居た。其處へ裏と表の戸を一度に押し破り入つて來たのは初、德の兩人であつた。松姫は驚いて、

『ヤアお前は初公、德公、血相變へて何しに來たのだ』

初『そんな事問ふだけ野暮だ。吾々は李助さまの命令によつて、頑固なお前をやつつけに來たのだ。最前は馬鹿な事をしやがつて大きに憚りさま。今度は李助さまから神變不思議の魔法を授かり出直して來たのだから、ヂタバタしても駄目だ。覺悟せい』

と兩人は樫の棍棒をもつて打つてかゝる。松姫は已むを得ず、其處にあつた机を取るより早く二人の打ち込む棒を右へ左へうけ流し、暫く防戰につとめて居た。　そして心の中に嚴の御靈大神、瑞の御靈大神、守らせ給へ、救はせ給へと念じつゝ、命限りに二人の荒男の激しき棒先を受けて居る。

松姫は數十合戰つて見たが、最早体力盡き、二人の鋭き棒に打ち殺されむとする一刹那、宙を飛んで駈け來りたる猛犬スマートは、矢庭に初公の足を銜へて引き倒した。續いて德公の足を又もや銜へて其場に引き倒し、ウウー〳〵と眼を怒らし睨みつけて居る。されど獰犬スマートは二人の體に些しも傷を負はせなかつた。二人は起き上り這々の体にて李助、高姫の酒宴の席へ、バラ〳〵ッと命辛々かけ込んだ。二人の逃げ行く姿をお千代、お菊の兩人は、十間許り間隔をおいた地點より打ち眺め、手を拍つてワイ〳〵と心地よげに嘲笑ひして居る。妖幻坊、

高姫は二人の樣子に不審を起し、

妖幻『こりや兩人、其態は何だ、些こ確りせぬかい』

初　『イヤもう大變でムいます。命辛々逃げて參りました』

『何が出たこ云ふのだ。松姫にこつて放られたのか。エー、何こ弱味噌だな』

『ヘエ松姫も中々の豪傑ですが、松姫所か、ごてらい奴が出て來て、イヤもう散々の目に遇つて來ました』

高姫『エ、間に合はぬ奴だな、これ德、一体何が出たこ云ふのだえ』

德は慄へながら、

『ハイ、松姫こ渡り合つて居りました所へ、俄に小北山の狼が飛び出し、吾等二人を銜へて倒しました。それ故俄に怖ろしくて、髪の毛が縮み上り手足が慄ひ戰き、こう〳〵此處まで命辛々逃げ延びました。何程出世さして貰つても、こんな怖い事は孫子に傳へておく譯には斷りです。出世なごはもうしたくはありませぬ』

妖幻『何こまア弱虫だな、狼位が何怖ろしいのだ。狼なんかは友人だ……おつこごつこい、友人も同樣だ、アハ、、、、』

初　『もし李助樣、貴方は狼が怖くないのですか』

『狼が怖くて此世の中に居られるか。今の人間は、何奴も此奴も美しい顏をして人間の假面を被つて居るが皆狼だ。ちつこ下れば狐、狸、蛇、鰌、蟇のやうな代物だ。貴樣も矢張四つ足の靈こ見えて、こう〳〵尻尾を出しやがつたな。口程にもない代物だ、アハ、、、』

高姫『ごうも口ばかりで、間に合ふ靈はないものだ。これ李助さま、中途半にして置く譯には

參りますまい。お前さまがこれから行つて始末をつけて下さい。若し松姫が此處を逃げ出し齊苑の館にでも行かうものなら、忽ち露顯して困るぢやありませぬか。何れは分る事ですが、仕組をするまでは、やつぱり三五教に化けて居なくちや、完全に目的が達せられないぢやありませぬか。ウラナイ教の再興を企てるのだから、今が肝腎要の時ですよ』

『俺が行けば何でもないのだが、併し茲は一つ工夫をして、下から出て松姫を懷柔し、樽俎折衝の間に都合よく談判を濟ませる方が無難でよからう。其代りに初公、德公は亂暴を働いた奴だから、松姫の前に連れて行つて尻を引きめくり、三百の笞を加へてやれば、それで松姫も安心して此方の云ふ事を聞くだらう』

『成程、又に血塗らずして敵を降すと云ふ御方針、道は李助さまだワイ、私もそれなら贊成致します』

初　『ア、もし〳〵李助さま、高姫さま、吾々兩人は貴方の御命令で荒仕事に行つたのです。それに何ぞや、松姫さまの前で尻を捲つて、三百も笞打たれて耐りますか、なア德、本當につまらぬぢやないか』

德　『こんな事なら、云ふ事を聞くぢやなかつたにな、李助さまは、さうすりや矢張惡神かも知れぬぞ』

妖幻　『もう斯うなつた以上は、貴樣等兩人、逃げようと思つたつて逃がすものか。曲輪の魔法によつて其方等兩人を卷いてあるから逃げられるものか、カナリヤが鳥籠に入れられたやうなものだ』

初　『のう德、餘りぢやないか、命がけの仕事をさゝれて、其上尻の三百も叩かれて耐るものかなア』

徳『アン〳〵〳〵、えらい事になつて來たわい、これと云ふのも餘り慾に呆けたから罰が當つたのだ。アン〳〵〳〵、三五の大神様、えらい取違ひを致しました。何卒お許し下さいませ、惟神靈幸倍坐世』

と涙ながらに手を合す。

高姫『ホ、、、、正直の男だな、態と芝居をするのだから、お前の尻を叩くやうに見せて地べたを叩くのだから些とも痛い事はない。そして甘く松姫を得心させ、無事事務の引繼をさして了ふのだ。さうすればお前も立派なお役人になれるのだからなア』

『ヤアそれでやつと安心しました。オイ初、矢張高姫さまや杢助さまの智慧は偉いものだもう安心だ、尻を叩いて貰はうか』

『ウン、そんな尻の叩きやうなら、百でも千でも、ビクとも致さぬ豪傑だ。何卒、高姫様杢助様、尻の千切れる所までお叩き下さりませ。之位の御用は屁のお茶でムいます』

妖幻『アハ、、、、それなら是から愈第二の作戰計畫にかゝらうかなア』

高姫『オホ、、、、何とまア、腰拔の英雄、有名無實の豪傑だこと』

兩人『ウエ、、エー、ウエーハ、、、、』

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　加藤明子錄）

未決監にて　瑞月

中央白く左右に赤き日の色は
水火の序をば示すなるらむ

第六章　舞踏怪（一三二）

松姫の館には、お千代、お菊と女三人首を鳩め、ひそ〳〵と何事か囁いて居る。勇敢なスマートが、松姫の危難を助けて呉れた事などが無論話頭に上つた。スマートは俄に魔の如く姿を消して仕舞つた。

千代『あれまア、可愛いスマートが何處へやら行つて仕舞つたわ、私どうしませう』

松姫『スマートは神様のお使で吾々の危難を助けに來て下さつたのだから、もうお歸りになつたかも知れないよ』

『それだつて私、あのスマートが好きで耐らないのよ。お母さまの危難を谷の向ふからよく探知して助けに來て呉れたのだもの。そして賢い犬で私とお友達にならうと云うて約束して置いたのだもの』

『茲暫くスマートさまの事は云うてはいけませぬよ、どんなお仕組があるか知れないからねえ』

『だつてスマートは戀しい犬だわ。なア、お菊さま、ほんたうに貴女だつて好きでせう』

お菊『私、貴女の次にスマートが好きのよ』

と斯んな話をして居ると、表にどや〳〵と人の足音が聞えて來た。

妖幻『こりや初、德、エ、貴樣は不屈きの奴だ。サア尻を捲れ、なぜ松姫樣に御無禮を働いたか。是から此杢助が其方の尻引つ叩いて懲しめて呉れる。惡の報いだと思うて觀念せい』

初『ハイ誠に〳〵に濟まぬ事でムいました。貴方のお名を借りまして、松姫さまを嚇かしましたのは重々惡うムいました。決して殺さうなどとは思うては居ませぬ。つい酒の興に乘

つて狂言をかいたのですから、何卒耐へて下さいませ』

『馬鹿申せ、そんな事申しても松姫様に御無禮を加へ、此方の名を騙つたのだから了簡はならぬ、尻を捲れ』

高姫『これ初、德兩人、お前は杢助さまや私の名を騙つて松姫さまに御無禮をしたぢやないか何ど云つても松姫さまに濟まないから、お前の尻を、千切れても構はぬから三百ばかり叩いて上げよう、德公さまは私の名を騙つたのだから私が叩いて上げる。初公は杢助さまの名を騙つたのだから杢助さまに叩いて貰ひなさい。サア早く尻をまくりなされ』

德『ハイ仕方が厶いませぬ。ごうぞソッど叩いて下さい。三百もそんな太い杖でやられては命がなくなりますから』

『命がなくなつたつて仕方がないぢやないか、お前は松姫様の命を取らうどしたのだから

サア杢助さま、貴方は、初公をお叩きなさい、オイ德、もうかうなつては駄目だ、早く尻を出さぬか』

ど館の中に聞えるやうな聲で四人は八百長芝居を始めかけた。

兩人は笞を振り上げながら、二人の尻を叩くやうな顏をして大地を叩く。

妖幻『一つ、二つ』

『キヤツ、キヤツ』

高姫『一つ、二つ』

『アイタ、、、アイタ、、』

『四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツ、九ツ、十』

『キヤツ、キヤツ、キヤツ、アイタ、、、、アン〳〵〳〵』

手許が狂うて、妖幻坊が力一ぱい打ち下した棒が初公の尻にビウと當つた。初公はキャッと云つて其場に倒れた。妖幻坊、高姫の兩人は、持場を定めて、尙も續け打ちに數をかぞへながら打つて居る。

初『これ杢助さま、約束が違ふぢやありませぬか、本當に叩かれるのなら、もう止めですわア、痛いワ』

高姫『これ初さま、默つて居なさらぬか、あいさには二つや三つ手が狂うたつて仕方がないぢやないか』

『それだと云つて痛いわな』

『二十、二十一、二十二、二十三、二十四』

『アイタ、、アイタ、キヤア、キヤッ〳〵』

高姫『痛かろ〳〵、痛いやうに撲るのだ。かうせねばお前の罪も亡びず、私の疑も晴れぬから、辨慶でさへも御主人の頭を撲つた事を思へば辛抱をしなさい』

德『本當に高姫さま、撲つちや耐りませぬわ、約束が違ふぢやありませぬか。何ぼお前さまの辨慶の（辯解の）ためだと云つてもやりきれませぬわ』

何だか屋外にザワ〳〵音がするので、お菊、お千代の兩人は立ち出でて見れば右の体裁である。兩人は一度に手を叩いて、

『あゝ面白い〳〵、芝居ぢや〳〵、痛くもないのに猿のやうに初公と德公が泣いて居るわありや八百長だよ。お母さま、一寸來て御覽、面白い芝居が始まつて居ますよ』

松姫も氣掛りでならぬので、お千代の言葉に引かれて外に出て見た。杢助、高姫の兩人は八百長と見られちや大變だと思ひ、眞劍に力をこめてビウ〳〵と撲り出したから耐らない、忽ち

臀部は紫色に腫上り血が滲み出した。二人は動きもならず、目を眩かして仕舞つた。松姫は驚いて其場に走り寄り兩手を擴げて、

『ヤア高姫様、杢助様、如何なる事か存じませぬが、ごうぞ暫くお待ち下さいませ』

高姫『イヤ、お前さまは松姫さま、長らくお目に掛りませぬ、此兩人が吾々の名を騙つてお前さまを苦しめたさうですから、今折檻を加へて居る所です。何卒お止め下さいますな。これ杢助さま、もつと打つてやりなさい。こんな奴は死んだつて構ふものか』

『杢助さま、高姫さま、お腹が立ちませうが、此等兩人は小北山の役員、如何なる事がムいませうとも、私に云つて下されば何とか致しますから、まア〳〵待つて下さいませ』

妖幻『イヤ初めてお目に掛ります。貴女が松姫さまでムいましたか、えらいお氣を揉ませまして恐れ入ります。許し難い奴なれども、貴女のお言葉に免じ許してやりませう。これ高姫お前も許してやりなさい』

高姫『エ、私はどうしても許しませぬ。三百の答を加へなくてはなりませぬ。私や貴方の名を騙つて惡事をなした代物だから、以後のみせしめ、息の止まる所まで撲つてやりませう』

ピシヤ〳〵と撲りつけた。德公は息が切れむばかりになつてヒー〳〵ひしつて居る。漸くにして松姫の仲裁によつて鞭を加へる事だけはやめて了つた。松姫は、お千代、お菊に命じ水を運ばせ、兩人に呑ませ且つ尻に水をかけてやつた。二人は無我夢中になつて起き上り、尻の痛さに肱をついて庭に横たはつて居る。

松姫『まア可愛さうに、酷いことなされますなア、貴方等の氣の強いのには私も感心致しました』

高姫『私だつて斯様な事はしたくはありませぬが、杢助様と私が貴女を殺して來いといつたや

うに申して亂暴を働いた惡者ですから、以後のみせしめに笞を加へたのです。松姫さま、何卒疑はないやうにして下さい、こんな獣は何を申すか知れませぬからなア』

『ハイ何卒お氣遣ひ下さいますな。善惡は神様が御存じですから、私等は善惡を審く力はありませぬ。サア何卒此處は門先……中へ入つて下さいませ。これお千代や、お菊さまと二人、初公、德公の側に筵をもつて行つて其上に寢かせ、お前等が世話をして上げて下さい。お母さまは一寸お二人さまとお話があるから』

と二人の介抱を二人の少女に命じ置き、高姫、杢助を居間に引き入れた。

松姫『高姫様、お久しうムいます。貴女は生田の森の神司として、琉の玉を御守護遊ばすとか承はり、お羨ましい事だと存じて居りました。此頃は又齋苑の館へお越しになつて居たさうでムいますねえ』

『ハイ一寸都合があつて齋苑の館へ參りましたが、神様の命令に依つて、此小北山は高姫の系統蝶鱗別が開いたのだから、其方が行つて教主となり、松姫さまは生田の森へ行つて貰へとの事でムいます。つまり云へば交迭ですな、自轉倒島は又景色のよい所ですな、高城山からは僅か三十里許りの所でムいますからな』

『それは神界の御都合であれば是非に及びませぬが、併し貴女は齋苑の館の八島主の命様から御命令を受けてお出でになりましたか、神様の命令と云つても、現界の仕事は矢張現界の法則を守らねばなりませぬ。ついては御辭令がムいませう。一寸拜見さして頂きませう』

『馬鹿な事を仰有るな、松姫さまにも似合はぬ愚問を發するぢやありませぬか。三五教は人民の教を立てる所ぢやありますまい。神様の御命令で働く所でせう。私も誠の義理天上

様の御命令で忙しくて仕方がない身を、小北山の神司となつて來たのですよ。お前さまは神様の御命令を聞いて生田の森へ行つて貰ひたい、元はお前さまの師匠ですから、私の云ふ事を聞くでせうね、そして杢助さまは生田の森にムつたけれど、今は齋苑の館の總務、此お方がムつた以上は辭令も何も要りますまい。つまり八島主さまの意見は杢助さまの意見、杢助さまの意見は八島主さまの意見、又八島主さまの意見は義理天上の意見、義理天上の意見は高姫の意見ぢやぞえ』

『いや分りました、それなら仰に從ひ貴女に事務の引繼を致しませう。それについては私は解職の報告祭、貴方等は新任の報告祭をなさらなくてはなりますまい。それでなくては神様の御用の引繼ぎは出來ませぬからなァ』

『イヤ尤もでムいます。お前さま立派に引渡して下さるか、偉いものだなァ。其代り生田の森へ行つて下さい、又生田の森へ轉任の辭令がないと仰有るだらうが、現在此所に杢助さまがムるから、生證文だ。どうか安心して行つて下さいや』

『左樣ならば事務の引繼ぎを致しませう、善は急げと申しますから、一時も早くお空の大神様へ參拜致し、報告祭を行はうぢやありませぬか』

『それは眞に結構でムいます。杢助さま、お前さまも、何程靈界の天人だからといつて、今日は新任の報告祭だから參らねばなりませぬぞや』

『ウン仕方が……ウンない、イヤ結構だ、私も報告祭に參列させて貰ひませう』

松姫『それでは貴方等にお裝束をつけて頂きたうムります。又それ迄に神饌の用意や祓戸の式をせなくてはなりませぬから、役員にその準備を致させませう。肝腎の初や德は貴方等に答を當てられ、八百長芝居が利き過ぎて、あの通り平太つて居ますから、他の役員に命じ

ませう。これ、お千代や、お前はお菊さまに二人の介抱を賴み、文助さまに祭典の用意を命じて下さい』

お千代は、

『ハイ』

と一言後に殘して、文助に松姫の命令を下すべく階段を下り行く。文助は早速四五の役員に命じ、祭典の準備を整へしめた。彌〻祓戸も濟み神饌も濟んだ。松姫、高姫、杢助は新しき衣裝を着替へ、悠然として上段の石の宮の前に現はれた。

忽ち神饌は踊り出し、供へた木の果などは空中に蚋の舞ふ如く舞ひ狂うて居る、さうして人參も大根も山の薯も蜜柑も川魚もピン〳〵跳ね出し踊り出した。高姫は首を傾けて非常に感心をして居る。

『何とまア神德の高い者が御用をする事になると偉いものだなア、神樣が大變にお勇みだと見えて、お供へ物が中天に舞ひ上り、皆踊つて居る。これ松姫さま、偉いものでムいませうがな。あれ御覽なさいませ。神樣が四邊の木の上に鈴なりになつて居られませうがなエ、見えませぬか、修業の足らぬものは仕方がムいませぬな。義理天上さまが、松姫をおつぼり出せ……いや生田の森に遣はせと仰有つたのも、斯んな仕組があつたからだらう。あゝ宙空に八百萬の神樣が勇んでお出でになることわいなア。ネーブルなどは、あの通り目のとゞかぬ所まで上つて舞踏をやつて居ます。何と神德と云ふものは爭はれぬものだなア』

杢助は何とも云へぬ澁い顏をして頭の痛いのを耐へて居る。高姫は益々調子に乘つて法螺を吹いて居る。

松姫『これ高姫さま、これ程神様がお勇みになつて居るのですから、一遍、ユラリ彦や月の大神、日の大神様のお扉を開けさせて頂きませうか』

『あゝそれが肝腎だ。お前さま、開けて下さい、私が神様に直接にお話し致しますから。嘸神様も高姫にお給仕をして貰ひ、杢助さまに構うて貰へば御満足なさるだらう。大神様齋苑の館の杢助と義理天上日の出神が、今日から御世話をさして頂きますぞや』

松姫はスツと神前に進み、中の社の扉をパツと開いた。杢助、高姫の二人はアツと叫んで其霊光に打たれ、ヨロ〳〵〳〵と七歩八歩後すざりをした途端に、断岩絶壁から逆さんぼりに、キザ〳〵の岩の上に顚落し「ウン、キヤツ」と怪しき聲を立てながら、痛さを耐へ、

『高姫來れ』

と一生懸命坂道を逃げ出した。初公、徳公兩人は之を見るより尻の痛さも忘れ、トン〳〵〳〵と二人の後に従ひ一生懸命に逃げ出す。折からヨボ〳〵と階段を上つて來る女助に突きあたり妖幻坊は女助の顏を引つかき坂の下に投げつけながら、飛ぶが如くに雲を霞と駈け出す。高姫は金切聲を振り立てながら髪振り亂し、でつかい尻を振りながら可愛い男を逃がしちや大變だと、一町許り間隔を保ち、一本橋を渡り怪志の森を指して逃げて行く。又一町許り後れて、初徳の兩人が、

『オイ〳〵』

と叫びながら、青草の芽含んだ野路を追つ駈けて行く。小北山の頂から、

『ウーウーワウ〳〵〳〵』

とスマートの聲、雷の如くに杢助の妖幻坊の耳に入る。

是より、スマートは松姫の返書を首に括りつけられ、初稚姫に報告すべく祠の森をさして歸

り往く。

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　加藤明子錄）

未決監にて　瑞月

瑞御魂生れし吉日の前後三日
月の鏡のかすむ歎てさ
ナイフルの吾生れたる文月の
十二の夜半に搖れる怪しさ

第二篇　夢

幻樓閣

第七章　曲輪玉（一三三）

階段を十二三階上つた所で、文助は妖幻坊に顔をひつかゝれ、突倒され、ウンと呻いて、暫くは氣が遠くなつてゐた。それ故、後から走つた高姫や初、德の事はチツとも知らなかつた。依然として、彼等一同は教主館に休息し居るものゝみ考へてゐた。ヤツと氣が付き見れば、懷に何物か蜂の巣のやうな聲が聞えて來る。文助は、

『ハテ此奴ア不思議だ。杢助さまに衝突して氣が遠くなり逆上せて居るのかなア』

と思ひながら、懷へ手を入れると、餘り重たくない、丸い塊の物が懷に殘つてゐた、周圍は石綿のやうに軟かく、そして耳へあてゝみると「ウーン、ウン」と呻つてゐる。文助は少時掌に載せたり、耳に當てたりして考へてゐた。そしてハタと片手に膝を打ち、

『ヤ、此奴ア、蜂の巣だ。うつかり破らうものなら、此悪い目を此上に刺されちやたまらぬ。李助さまも隨分悪戯好きだな、人が目が見えぬかと思うて、懐へつゝ込んで行つたのだな。餘りエライ勢でおりて來たものだから、私と衝突して、それでつき倒されたのだ。何だか顔がピリ〳〵する。石で顔をすり剝いたと見える』

と獨り判斷してゐる。

『そして握りつぶしちや蜂が可愛相だ、併しながら、そこらに放つておけば人がいたづらすると困る、此奴ア一つ、御玉筥の中へでも入れておかうかなア。ウン、幸ひ、こゝに鞠の空箱がある。丁度具合がよささうだ』

と云ひながら、あつい板箱に玉を入れ、荒白苧で固く結び、自分の座右において、又もや松に日の出の繪の書きさしを、せつせと彩色つてゐた。箱はカタ〳〵と自然に飛上るのを別に怪しとも思はず、蜂が非常にあばれてをるのだと早合點し、其上に珍石の風鎭を載せておいた。唸りはます〳〵烈しくなつて來た。

『ハ、ア、蜂がどう〳〵巣を破つて出よつたと見える、エー〳〵蜂の巣を破つたやうだといふが、いかにも喧しいものだなア』

と獨語ちつゝ、又もや繪筆をせつせと走らしてゐる。

話變つて妖幻坊は逃げしなに、自分の變相術に必要欠く可らざる曲輪の玉を、ぎつかにおし、俄に體の具合が悪くなつて來た。此曲輪は肌を離れてから一晝夜經てば、變相が現はれるのである。そして山の上からスマートが雷の如き聲で唸つたので、ペタリと路傍の芝生の上に倒れて了つた。そこへ高姫が一生懸命に追つ付き、

『コレ李助さま、お前さまはこんな所に倒れてゐるのかいな。サア〳〵起きなさい〳〵、

ごつこも怪我はありませぬかなア』

妖幻坊は懐を探り、曲輪のない事に氣がつき、蒼白な顏をし、

『ヤ、失敗つた、肝腎の寶を失つて了つた。これがなければ忽ち正体が現はれるがなア、あゝ如何したらよからうかなア』

『コレ李助さま、正体が現はれると今仰有つたが、ソラ一体何の事ですか。そして曲輪とか、今云はれたやうだが、其曲輪は何をするものですか』

『ウン、これは一名金剛不壞の如意寶珠と云つて、あれさへあれば、世の中は自由自在になるのだ。それをこう〳〵落して了つたのだ、あゝ困つた事をしたわい』

『何、金剛不壞の如意寶珠？　それはお前さま、何處から手に入れたのだい。私も其寶珠については隨分苦勞したものだよ。一旦私の腹に呑込んだ事があるのだからな、それをお前さまが持つてゐたのは、因緣こいふものは怖いものだな。如何して、李助さま、貴方のお手に入りましたか』

『私が總務をやつてゐたものだから、始終齋苑の館のお寶物として監督してゐたのだ。それをば此方へ來がけに、ソッと物して來たのだよ』

『それを何うしたと云ふのだい』

『ごうも小北山でおとして來たやうだ、確に階段を下る時には懐にあつたやうに思ふがあの文助に行當つた時に、彼奴に取られたかも知れない。あゝ向ふの手に入るからは最早取返す事も出來まい。反對に、あちらからあれを使はれようものなら、何うする事も出來ぬからのう』

『李助さま、そんな氣樂な事言うてをれますか。假令火の中へ飛込まうが、水の中へ入ら

うが、取返さなくちや、思惑が立たぬぢやありませぬか。其玉さへあれば三五教を崩壞させ、ウラナイ教の天下にするのは朝飯前の仕事ぢやないか、何程吾々があせるよりも、其玉一つがどれだけ働きをするか分りますまい。之から私が調べて來ます。もしも文助が持つて居つたら、ひつたくつて來ますから』

『イヤ、あの玉はお前なんぞが、いらふものぢやない、人がいらふと消えて了ふからな』

『馬鹿な事を言ひなさるな、私だつて一度は手に持つた事もあり、口に呑んだ事もあるのだ。滅多に消える氣遣ひはありませぬぞや。サ、これから私が取返して來ませう』

『何と云つても、お前は此處を動いちや可かない、此處に居つてくれ。何時スマートがやつて來るか、分つたものぢやないから』

『ヘン、スマート〳〵て、何ですか、ありや四足ぢやありませぬか』

『俺はあの犬に限つて、頭が痛くつて仕方がないのだ』

と話してゐる。そこへハア〳〵と息を喘ませながら、初、德の兩人が漸く追付いた。

妖幻『ヤ、初、德、お前はついて來たのか、あゝ偉いものだ。ヤツパリ俺たちの味方だ』

初『ハイ、もうあなた、かうなつちや、私だつて小北山には居られませぬ、貴方等のお世話になるより仕方がないと思つて、後追つかけて參りました』

高姫『あゝ德も來て居るぢやないか』

『ハイ、何卒宜しう願ひます。到底小北山へは歸る顏がムいませぬからな。貴方等の御世話になるより、最早活路はムいませぬ』

『お前、御苦勞だが、一寸マ一度、小北山まで行つて來て貰へまいかな』

初『ヘー、行かぬこたムいませぬが、何かお忘れにでもなつたのですか』

『李助様が一寸した、丸いものを落してムつたのだ。大方、あの文助が拾うて居るに違ひないから、お前うまくチョロまかして、文助の手から受取つて來て下さい。いゝ子だからな』

『へー、行かぬこたムいませぬが、又尻の三百も叩かれちや堪りませぬから、小北山ばかりはこらへて貰ひたいものですな。約束を破つて、貴女は本當に叩いたものですから、足が痛くつて、こゝまで走つて來るのが並大抵のこつちやなかつたですよ。此痛い足で、あのきつい坂を再び登れこは、チッこ酷いですなっ德、お前何だ、おれこは餘程疵が輕いやうだから、一寸使に行つて來てくれまいかなァ』

德『俺だつて、貴様より餘程きついぞ。ごうも痛くつて、いのこがさして、碌に歩かれやしないワ。足が丸切り棒のやうになつて了つたよ』

『それなら二人行つて來て下さいな。少々ばかり遲くなつても構はないから、私は向ふの怪志の森で、李助さまと、神様に祈つて待つてゐるから……』

二人は不承々々に踵を返し、足をチガ〳〵させながら竹切れを拾つて杖こなし、一本橋を危く渡り、小北山の急坂を登つて、漸く受付の前に行つた。見れば文助は一生懸命に繪を描いてゐる。

初『もし文助さま、お前さま、最前はひどうこけましたなァ、どつこもお怪我はありませんだかなア』

『ハイ有難う、李助さまが、餘り勢よく坂を下つてムるのに、私は目が悪いものだからヨボ〳〵して上るのこ、細い階段だから、衝突し、はね飛ばされて、チッこばかり、こんな疵をしました、ピリ〳〵して仕方がないのだ。それでも神様のお蔭で、御神水をつけた

ら餘程痛みが止まりましたよ。今晩はお土をドッサリ頂いて休まして貰はうと思つてゐるのだ』

『ヤア、何とえらい疵だな、爪形が入つて居るぢやないか』

『尖つた石が澤山に敷いてあるものだから、こんなに傷いたのだよ。李助さまは教主館にゐられるだらうな。そして高姫さまも機嫌がよいかなア』

初公は文助が、まだ李助、高姫等が逃出した事を知らぬものと悟り、稍安心の胸をなで、

『ハイ、今奥に休んでゐられますよ。そして、エー、文助さまに衝突してすまなかつたから、斷りを云つて來てくれと仰有るのですよ。李助さまも目がまはるとか云つて休んでゐられます、高姫さまも介抱して厶るものだから、貴方のお伺ひにも行かれないからと云つてくれと云はれました』

『それはマア御親切に有難いことだ。何卒宜しう、文助が云つて居つたと傳へて下さい。あゝ神樣のお道の方は、何から何までよく氣の付くものだなア』

『時に文助さま、お前さま何か不思議なものを拾はなかつたかな』

『別に何にも拾つた覺はないが、李助さまと衝突した時、私の懷に妙な聲がするので探つて見れば、蜂の巣のやうなものが出て來たのだ。そしてそれを耳にあてゝみると、ブンブンブンと唸つてゐる。此奴ア李助さまが土窩蜂の巣を握つて來て、私を吃驚ささうと思つて、私の懷へ捻込んだのだな。エヽ、年してテンゴする人だと思つてゐる。併し何程年寄つても、神樣のお道へ入ると子供のやうになるから、つい誰しも惡戯のしたくなるものだ』

『其蜂の巣とやらを一寸見せて下さらぬか』

『イヤ〳〵そんな物いらつて、何うなるものか。私はそこらへ蜂に出られちや大變だと思つて、箱の中へ入れて了つたのだ。ごうやら蜂が巣を破つたとみえて、喧しい事いの。こんなものをいぢつたら、それこそ一遍に目を刺されて了ひますよ』

德『其蜂の巣を是非とも見せて頂きたいものだな、刺されたつて構やしないぢやないか』

『イヤ、おきなさい〳〵、お前さまばかりの難儀ぢやない、こんな所であばれられようものなら、誰もかれも大變な目に遇はねばならぬ。それだから私がチヤンと箱に入れてしまつておいたのだ』

初『何卒一遍、其箱なつと見せて下さいな。中まで開けようとは言ひませぬから……』

『イヤ〳〵、お前達に渡してたまらうか、之は直接に李助樣にお渡しするのだ。お寢みになつて居れば、何れお目が醒めるだらう。其時私が手づから御渡しする積りだ。これは蜂の巣のやうだが、よく〳〵考へると、何かの實らしいから、お前さまに渡すこたア出來ませぬワイ。たつて渡せと云ふなら、李助樣から何か印をもつて來て下さい、さうすりや其印と引替に渡しませう。後から面倒が起ると文助も困るからなア』

『あゝ困つた事だなア、何とかして持つて歸ななくちや駄目だぞ』

『コレ、お前は何といふ事を仰有る。どこへ持つて歸ぬのだい』

『李助さまのお居間まで持つて歸つて、其ブン〳〵玉をお慰みにするのだ。さうすればお氣の慰めになつて、早くお治りになるだらうからな』

『それ程必要なら、之から私が、つい五間許りだから、李助さまのお居間へお訪ね申して直接お手に渡しませう。遠い所ではなし、面倒な手續きもいらないから……』

『オイ、初公、此奴ア迚も駄目だぞ。直接行動だ。此文助を押倒しといて持つて行かうぢ

やないか』

『ヘン、偉さうに云ふない、私が隠してあるのだから、口から外へ出さぬ限り、お前たちが二年三年かゝつて探した所で、其所在が分つてたまるものか。何でも、あれは結構な神力を持つてゐる寶に違ひない。私の身に添うてゐるのかも知れない。何だか俄に惜しくなつて來た。李助さまが私を突き倒してまで、懐に入れてくれたのだから、今になつて返せと云つたつて、權利が此方へ移れば最早文助の物だ。滅多に返しませぬぞや』

此時側において風呂敷で隠してあつた玉箱が、ウーン〳〵と一層高く唸り出した。二人は、

『ヤ、何でも此近くにあるらしいぞ。オイ、此盲爺を貴樣、突倒して抑へてをれ、其間に俺が捜索するから……』

『コリヤ、目がみえなくても、まさかの時になればコレ此通り、細かい繪を書く俺だぞ。俺はワザとに盲と云つて、貴樣たちの樣子を考へて居るのだ。盲でない證據は此繪をみいこれでも分るだろ。そして柔道は百段の免狀取りだ。お前達が十人や百人束になつて來たとて、こたへるやうな文助ぢやないぞ。此玉はブン〳〵いふから文助に授かつた文助玉だぞ。貴樣達に渡すべき物ぢやない、秋口の蚊のやうにブン〳〵ぬかさずに、すつ込んでなさい。それよりも早く炊事場へ行つて、御飯の用意でもしたがよからうぞや。ゴテ〳〵申すと、松姫さまに申上げるぞえ』

初『ヤア、此奴ア、一寸グッが悪いワイ。柔道百段と聞いちやア、滅多に手出しは出來ぬぞ俺も尻さへ痛くなけりや、こんな爺さまの一人や二人何でもないが、だん〳〵腫れて來て歩けないからな』

徳『それでも李助さまや高姫さまが怪志の森に待つて厶るぢやないか』

『ナニ、怪志の森に待つてゐるこ。ハハア、さうするこ、松姫様に叱られて、逃げよつたのだなア、フーン、それで何だか犬がワン〳〵吠いて居つたて』

『オイ初公、此奴、目が見えるなんて嘘だよ。何でも此間中捜せばあるのだ。貴様、此爺こ一つ捨闘してをれ、其間に俺が捜すから』

『俺は體が自由にならぬから、ヤツパリ貴様、文助こ捨闘してをれ、其間にマンマこ玉を捜し出して持つて行くから……』

『ヨーシ』

こ德は文助の足をさらへ、其場に倒した。文助は實際目が見えぬのである。一生懸命に文助は呶鳴りながら、德こ捨闘をしてゐる。德も尻がはれ、足が自由に動かぬので、盲の文助に捻ぢ抑へられ、フー〳〵いつて居る。初公は音のするのを耳をすまして考へてゐるが、前にするかこ思へば後に聞える、右に聞えたり左に聞えたり、頭の上に聞えたり又床下のやうでもあり、チツこも見當がつかなかつた。そこへ二人がドタン、バタンこ騒ぐ音、喚く聲がゴツチヤになつて、如何しても處在が分らない。フト風呂敷に躓いた拍子に、古い四角い箱が出て來た。手早く手に取つて耳にあてるこ、ウン〳〵〳〵こ唸つてゐる。初公は、

『ヤ、これに間違ひない』

こ懐に捻込み、文助の頭を三つ四つこついた。文助はビツクリして手を放した、トタンに德公は漸く遁れ、初公こ共に足をチガ〳〵させながら、坂路を這ふやうにして下つて行く。漸くにして命カラ〳〵怪志の森へ歸つて來た。そして手柄さうに妖幻坊の前に現はれ、

兩人『ヘー、やつこの事で、只今歸りました』

妖幻『ヤ、それは御苦勞だつた、分つたかなア』

初『へー、中々分りませぬ、文助の奴、ごつかへ隠して了ひ、すつたもんだと、小理窟ばかり吐して、そんな物は知らぬといふのです。そこで私と德公が、何知らぬ筈があるものかはしかいの、はしこないのつて、吾々兩人を右へ投げ左へ投げ、手玉に取つて翻弄致します。私も常なら、あんな爺位指一本で押へてやるのですが、何しろお前さまらに打たれて此通り腫れ上つたものだから、其上又痛い尻を叩かれ、イヤハヤ苦しい目み致しました』

『それはさうと、玉は手に入つたのか。どうだ、早くいはぬか』

『へー、此ブン〳〵玉は、ブン〳〵いふから文助に因縁がある、これは李助さまが私にくれたのだ。私を突飛ばしてまで懐へ捻込んで下さつたのだから、返せといつても、何處までも返さないと頑張ります。そして此玉は始は蜂の巣かと思つてゐたが、決してさうではない、結構な寶だと云つて、あの爺、執着心が強く、何と云うても返さないのです』

高姫『エーエ、雉子の直使とはお前の事だ。何をさしても役にたゝぬ男だな、お前さまは睾丸を何處へ落したのだ』

初『へー、餘り尻を叩かれたものですから、ビックリしてごつかへ轉宅して了ひました』

德『併し兩人が奮戰激闘火花を散らし、戰ひの結果、戰利品として、其ブン〳〵玉をこゝへ持つて歸りました。イザ、改めて、お受取り下さいませう』

『何だ本當に、腹の悪い、肝をつぶしたぢやないか。早く此處へお出し、コレ李助さま、喜びなさい、此奴等二人、碌でなしだと思つて居つたが、みんなこと役に立つたやうです』

妖幻『オイ兩人、本當に其玉を取返して來たのか』

『へーへ、それは流石初さまですワイ』

『某が文助爺と大捨闘を演じてゐる、其隙に初公に命じてぼつたくらしたのですよ』

『それは御苦勞だつた、ごうぞ、サ、早く俺の懐へツッと入れてくれ』

高姫『一寸私に見せて下さい、如意寶珠の玉なれば私も因縁があるのだ、眞か僞か一遍調べておく必要があるから、サ、チャッと見せなさい』

『イヤ決して見せちやならないぞ、直樣私に渡すのだ、高姫に渡すと、一寸都合の悪い事がある、之は誰にも渡さないといふ玉だから』

『ヘン、よう仰有いますワイ。初公が今現に持つて歸つたぢやありませぬか。女房の私が何故一寸位見られぬのです。お前さまに返さぬといふぢやなし、そんな水臭い事云ふものぢやありませぬぞや』

『それでもお前は、大變に如意寶珠に執着心を持つてゐるから、渡せないと言ふのだ。此寶珠はチッとも慾のない者が持たなくちや汚れるからな』

『ヘン、汚れますかな。それなら、よう私のやうな汚れた女と酒を飲んだり、一緒に寢んだりなさいますな。何とマア口といふものは調法なものだ。それ程私が憎いのですか。ヘン、宜しい、私も私で、考へがありますから』

『さう怒つて貰つちや困るぢやないか。今見せなくても、かうして立派に箱へ入つてるのだから、トックリと又見せてやるぢやないか。オイ初、德の兩人、中を開けて見たか、何うだ』

初『エヽメッ相な、かうブン〳〵唸つてるのだから、うつかり開けて蜂にでも刺されたら大變ですからな、コハ〴〵持つて來たのですよ』

『ヤア、そりや出かした、それで結構だ。オイ高姫さま、又今晩ゆつくりと、お前だけに

見せるから、それまで待つてゐてくれ。こゝで開けると、此兩人が見るからなア。さうすりや、それだけ神力がおちるのだから』

『成程、それなら分りました。キット見せて下さるでせうなア』

『ウン、男が一旦見せると云つたら見せるよ』

『キットですなア』

『ウン、キットだ。もし間違つたら、俺の一つよりない首を、幾つでもお前に進上する。何と云つても、親しい夫婦の仲ぢやないか、さう俺の心を疑ふものぢやないワ』

『誠に濟みませぬ。サ、李ちやま、モウちつと許り先方まで行きませうか』

初『もし李助さま、高姫さま、私は足が痛くつて、モ一歩も歩けぬやうになりました。ごうぞ此處で今晩は露宿して下さいな』

德『私も歩けませぬ、餘り尻を叩かれたものですから、ごうぞ明日の朝まで、こゝでとまる事にして下さい、さうすれば明日になつたら、キット歩けるやうになるでせうから』

高姫『エーエ、仕方のない男だなア。コレ李助さま、こゝに、今晩は泊つてやりませうか。二人が餘り可愛相ぢやありませぬか』

妖幻『あゝ仕方がないなア。せめてモウ一里許り、何うとかして歩くことが出來ぬのか。オイ兩人、チツと氣をはりつめて、モウ一里許り從いて來たら何うだ』

初『なんと云つて貰つても、とても體が動きませぬワ』

『ウーン、そいつア困つたのう。德は何うだ、チツト位歩けるだろ』

『私だつて、同じ事ですわ、初の疵よりも餘程ひどいのですからなア。本當に貴方等は甚い目に遇はしましたねえ。八百長の芝居がこんなにならうとは思ひませなんだ。今こそ氣

が張つて居りますが、實の所は痛くつて〳〵仕方がありませぬワ』

高姫『あゝあ、これも係り合せだ。仕方がない、それなら此森で、今晩は一夜明かす事にしませう。なア李助さま、貴方もさうして下さいな』

『ウーン、それなら、さうしてもよい。併し、高姫、お前はスマートが來ないやうに氣をつけてゐてくれよ。俺は何だか知らぬが、あれ位氣にくはぬ奴はないのだから』

『私だつて、彼奴の聲を聞くと、腹の中がデングリ返るやうに苦しいのですよ』

初『もし、お二人さま、私の云ふ事を聞いて下さつて、こゝでお泊りになるのなれば、私は犬の番を致します。犬なら、假令五十匹や百匹やつて來たつて、ビクとも致しませぬ。若い時から犬博勞と綽名を取つた男です。隨分犬の咬み合せに、そこら中へ行つたものですから、犬に對する呼吸は充分呑込んで居りますがらなア』

高姫『ヤ、それは重寶な男だ。さうすると、お前は今晩は犬番を勤めて貰はうかな。狐狸の集まつてゐる藝者屋でも、ヤツパリ、ケン番がおいてあるからな』

初『それなら、德と兩人が神妙に御用致しませう、あゝ有難い〳〵、いよ〳〵星の蒲團に草の褥、といふ段取だ。桃の花の香りが、何とはなしに、身に沁みるやうだ。あゝあ早いものだ、こう〳〵日が暮れたとみえるワイ。こゝは怪志の森と云つて、化物が出るといふ事だが、何と云つても、時置師神樣のお供だから大丈夫だ。そこへ、あのブン〳〵玉があるのだから、何が來たつて、チツとも恐るゝ事はない、なア德』

『ウン、さうだ〳〵、それなら高姫樣、李助樣、お休みなさいませ』

高姫『コレ〳〵、お前達、お祝詞をあげて寢まぬかいな。私は靈が違ふから、李助さまと二人は神樣を拜む譯には行かない。何と云つても高天原の靈國の天人の靈、日の出神の義理天

上だから、お前達は八衢にまだうろついてをる、言はゞ娑婆亡者だから……天國へやつて下さるやうに、起きた時こ寢る時には、必ず天津祝詞を奏上するのだよ』

妖幻『イヤ、兩人、今晩は天津祝詞は免除しておく。澤山の天人樣がお出でになるこ、一寸御挨拶に困るからなア、ハッハ、、』

『コレ、今日は李助さまの御挨拶で、許して上げるけれご、明日からはキット天津祝詞を上げるのだよ』

兩人は、

『ハイ承知致しました』

こ言ひも了らず、疲勞れはて、横になつた儘、白河夜船を漕いでゐる。其間に高姫は李助を促し、一生懸命に森を脱け出し、浮木の里を指して、暗の道を韋駄天走りに駈出した。高姫及び妖幻坊は、今後如何なる活動をするであらうか。

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　松村眞澄錄）

瑞月

未決監にて繪葉書を見て

坐ながらに楓の名所へ誘はれ
都の内外の眺めせしかな
ゐながらに日本も西洋も巡りけり
恵み越されし名所繪葉書に

第八章　曲輪城（一三二三）

常世の國に生れたる
自ら名乗る高姫は
ならぬ第二の地獄道
金毛九尾の惡靈や
魅られ茲に兩親の
ソッとぬけ出でエルサレム
高宮姫の若盛り
怪しき仲となり果てゝ

常世の姫の再來と
地獄中有婆婆世界
兇黨界に蟠まる
其他百の曲神に
隙を窺ひアーメニヤ
都を指して進み行く
東野別とゆくりなく
子まで成したる戀仲を

北光神に遮られ
高宮姫は止むを得ず
其成果はバラモンの
三五教を聞きかじり
肉体界の精靈に
流れ〳〵てフサの國
教の射場を建設し
魔我彦其他の弟子達を
變性男子の系統ぞ
名乗りて世人を欺きつ

こゝに生木のさき別れ
彼方此方と漂浪の
神の教やウラル教
小才の利きし所より
其全身を左右され
北山村にウラナイの
股肱と頼む黒姫や
呼び集へつゝ日に月に
日の出神の生宮と
遂に進んで自轉倒の

島に渡りていろ〳〵こ
神素盞嗚の大神の
感喜の涙絞りつゝ
三五教に救はれて
又もや兇靈に欺かれ
黄金の玉を握らむこ
狂ひ出したる果敢なさよ
島の八十島八十の國
我情我慢を後悔し
綾の聖地に奉職し

艱難辛苦の其結果
仁慈無限の御心に
茲に心を飜へし
神の司と成りけるが
金剛不壞の如意寶珠
心猿意馬の止め度なく
高砂島や龍宮島
廻り〳〵て末遂に
又もや猫の如くなり
暫く道を布きけるが

淡路の酋長東助が
分りし後は高姫の
吾子も玉も念頭を
後を慕ひてはる〴〵こ
夜を日についでウブスナの
神素盞嗚の隱れます
東野別に懇々こ
一度は悔悟せしものの
此失戀を如何にして
戀の涙にくれながら

幼馴染の戀人こ
心は暗に彷徨ひて
悉皆離れ戀人の
山海河野打渡り
大高原の齋苑館
高天原に參上り
天地の道理を諭されて
又もや意馬は狂ひ出し
回復せむかこいらちつゝ
五十を越えた身を以て

執念深き婆々勇み　風吹きすさび獅子熊や
虎狼の吠えたける　・河鹿峠をドン〳〵と
登りつ下りつ漸くに　祠の森に來て見れば
こはそも如何に此は如何に　下つ磐根に宮柱
太しき建てゝ千木高く　鎭まりいます皇神の
瑞の御舍拜觀し　ひそかに、うなづくほくそ笑
此處は名に負ふ河鹿山　齋苑の館の喉首よ
われは此所にて一族を　吹く神風に靡かせて
數多の役員信徒等を　將棋倒しに說き伏せつ
高姫王國建設し　三五教の向ふ張り

名を擧げくれむと思ひ立ち　日の出神の義理天上
變性男子の系統と　現はれ出でし高姫よ
天地開けし始めより　幾萬劫の末までも
元を攝んだ因緣の　身魂はわれよと頑張つて
祠の森の珍彥や　其他百の司等を
言葉巧に說き伏せて　暴威を揮ふ憎らしさ
斯かる所へ兇黨界　八岐大蛇の片腕と
現はれ出でし妖幻坊　高姫司の惡心を
目敏く探り身を變じ　齋苑の館の杢助と
現はれ來りウマ〳〵と　高姫司を誑惑し

茲に夫婦の約結び
五六七神政の妨害を
大黒主の大望を
盡してゐたる折もあれ
妻諸共に毒殺し
初心を貫徹せむものゝ
教の道の宣傳使
曲の企みを洞察し
非望を妨げ善心に
眞心盡し給へども

祠の森に居すわりて
力限りに遂行し
助けむものゝ全力を
思ひに任せぬ珍彦を
誰憚らぬ身となりて
企む折しも三五の
初稚姫が現はれて
身を謙り兩兒の
復して救ひ助けむと
いかゞはしけむ曲津見の

垢に汚れし醜魂は
恐れて犬に逐はれつゝ
力限りに逃げ出す
高姫司を誑かし
登りてこゝに一仕組
よからぬ事を企らみつ
照らされ忽ち仰天し
負傷をなしてスゴ〳〵と
曲輪の實を紛失し
春草萠ゆる野路を越え

其正体の暴露をば
河鹿峠をトン〳〵と
又もや曲津妖幻坊
小北の山の聖場に
なさむと思ひいろ〳〵と
月大神の靈光に
崎嶇たる岩上に顚落し
此處を逃出す其途端
小北の山を後にして
怪志の森の此方迄

來る折しも道の邊の
倒れて懷査ぶれば
魔法に使ふ品玉は
姿も知れぬ悲しさに
腕くみ思案にくれるたる
追つつき來る高姫や
しばし息をば休めつゝ
小北の山に落せしと
聞くより高姫いらだちて
曲輪の實を取返し
石に躓きバッタリと
妖幻坊が變身の
いつしか藻脱の殼となり
大地にドッカと胡床かき
かゝる所へ後逐うて
初公、德公兩人と
肝腎要の實をば
妖幻坊のかこち言
初、德二人に命令し
來れと嚴しく下知すれば

主命拒むに由もなく
忍び歸りて受付の
盲爺さまの文助が
ブン〳〵玉の因緣を
言葉巧に言ひなして
流石の文助頑張りて
二人は茲に意を決し
其間に玉をふんだくり
無理に引ずりドス〳〵と
妖幻坊や高姫に
再び小北の聖場に
樣子いかにと眺むれば
繪をかきながら物語る
聞くより二人はいろ〳〵と
取返さむと思へども
容易に渡さぬもどかしさ
忽ち爺さまを突倒し
雲を霞と痛い足
怪志の森に到着し
お褒めの言葉を頂いて

笑壺に入りし時もあれ
モウ一歩も進まねば
四人は評議一決し
白河夜船の夢うつゝ
聞きすましたる高姫は
暗を幸ひドシ〳〵と
浮木の里の入口に
落つるを目當に立寄つて
見れば曲輪は皎々と
眼を射られ眩暈し
俄に疵は痛み出し
ここに一夜を明かさむと
初、德二人は忽ちに
四邊に聞ゆる高いびき
妖幻坊を促して
浮木の里を指して行く
水音高き玉瀧の
曲輪の玉を洗滌し
輝き初めて高姫は
其場にドッと倒れける

妖幻坊は逸早く
隙を伺ひ妖術を
忽ち現はす蜃氣樓
其壯觀に比ぶれば
驚く許りの建築を
現出せしぞ不思議なれ
これにて吾の計畫は
いかに魔法を使ふとも
心の强き人間を
こゝにウマ〳〵高姫を
失心したる高姫の
使つて此處に樓閣を
珍の都のエルサレム
幾十倍とも知れぬよな
數多の魔神を使役して
妖幻坊は打笑ひ
いよ〳〵其緒につきにけり
神の形に造られし
使はにや出來ぬ醜の業
擒にしたる曲神の

得意や思ひ知らるべし
瀧の清水を掬ひ上げ
聲を限りに呼ばはれば
四邊キヨロ〳〵打眺め
目を見はりつゝ舌をまき
最早俄に天津日の
合點いかぬと俯いて
妖幻坊は打笑ひ
われは李助神司
手に入る上は此通り

妖幻坊は高姫に
口にふくませオイ〳〵と
息吹返し正氣づき
晝より明かき怪光に
あゝあ不思議、あゝ不思議
日の出神のお出ましか
思案にくれる可笑しさよ
アハヽハッハ高姫よ
瑞の御靈の御實
暗を變じて晝となし

神の力を現はして
忽ち變じて城廓を
喜び祝へ高姫と
高姫頓に感激し
善であらうが惡だろが
細工は流々仕上をば
皇大神を始めとし
日の出神の義理天上
力を併せ神の爲

春風渡る此野邊を
ゑがき出したる勇ましさ
背なでさすり呼ばはれば
假令李助神司
モウ此上は構はない
みて下されよ天地の
其他百の神樣よ
いよ〳〵之から李助と
世人の爲に活動し
五六七の御代を目のあたり　築きまつりて天の下

四方の民草喜ばせ　三五教の神司
瑞の御靈を初こし　東野別や其他の
百の司を驚かせ　アフンこさしてやらむずこ
俄に元氣を盛返し　妖幻坊こ手をひいて
今現はれし樓閣の　表門をばくゞりつゝ
奥殿指して進み入る　曲津身魂ぞ忌々しけれ。

（大正一二・一・一六　舊一一・一二・一〇　松村眞澄錄）

第九章　鷹宮殿（一三二四）

高姫は妖幻坊を何處までも杢助こ固く信じてゐた。而して金剛不壞の如意寶珠の力に依つてかゝる廣大なる樓閣が出來たのだこ思つてゐる。

『あゝ、私が秋山彦の館で腹へ呑んだ時には、これだけ威力のあるものこは思はなかつたヤツパリ私は神力が足らなかつたのだなア。小人玉を抱いて罪ありこいふ事は私の事か、同じ玉でも杢助さまがお使ひになるこ、こんなに立派に其神力が現はれるのだ。阿呆こ鋏は使ひやうで切れるこいふ事がある。使手がよければ阿呆も間に合ふ、竹光の刀でも正宗に優るものだ。ヤア私もこれから改心をしませう……イヤ改惡をしませう。杢助さまに使はれる如意寶珠は仕合せだなア。併しながら、是だけ自由自在に神力を持つてゐる男だか

ら、天下の美人は此神力を見たならば、キツと惚れるであらう。さうなつた時は年の寄つた此高姫は、折角結構な樓閣に住みながら、お拂ひ箱になつてはつまらない。どうかして如意寶珠を杢助さまの隙を伺つて吾懐に入れるか、但は呑込んで了つて、まさかの時の權利を握り、杢助さまの喉首を押へ、睾丸を握つておかねば、此高姫は安全な生涯を送る事は出來ぬ。オ、さうだ〳〵、それが上分別だ。鎌の柄を向ふに握られて、こつちが切れる方を握つてるやうな事では、到底生存競爭の激甚なる世に立つことは出來ない。杢助さまも偉い人だ、併し又女にかけてはズルイ男だから、これからあらむ限りの身だしなみをして、充分に蠱かしてやらねばならうまい』

と堅く決心しながら、杢助の後に從いて行く。奥殿深く進んで見れば、金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲、珊瑚珠等にて鏤められたる立派な寶座がある。妖幻坊は高姫を顧みて、

『オイ高さま、杢助の腕前は分つたかなア。サア、之からお前と俺とが此寶座に、日々上つて、萬民の政治をするのだ、どうだ、嬉しうはないか』

『ハイ、餘りの事で、あいた口がすぼまりませぬ』

と云ひながら半信半疑の念に打たれ、寶座を押へて見たり、柱を押して見たり、足元がもしや草ぼう〳〵たる田圃ではあるまいかと、探つてみたり、いろ〳〵雜多と調べてゐる。けれども何うしても疑ふ餘地がない。高姫はます〳〵笑壺に入り、

『俄に私も出世したものだ、三千世界に高姫位仕合せな者があらうか、ヤツパリ義理天上日の出神樣のお蔭だなア』

と小聲に言つてゐる。妖幻坊は高姫の背を二つ三つ叩きながら、

『オイ高姫、どうだ、違ひますかなア。蜃氣樓的城廓か、或は現實的城廓か、よくお調べ

なさい。之でも李助の云ふ事に反きますか』

『イヤ、モウ〳〵感心致しました。何處までも絶對服從を致しませう』

『高姫、お前の姿を一寸見てみよ、それそこに玻璃鏡が懸つてゐる。其前に立つてみなさい』

と指示す。高姫は玻璃鏡の前に現はれると、鏡面には十七八才の妙齢の美人、金襴綾錦の立派な衣服を着流し、色あくまで白く、頭に七寶の纓絡の垂らした冠を戴き、裾を一丈許り後に垂らした美人が立つてゐる。高姫はハッと驚き、心の中に思ふ樣……ハハー、李助さまは腹の惡い男だなア。こんな結構な館を持ち、こんな美人をかくまうておき、私のやうな婆を、此處へ連れて來て、恥をかゝし、恪氣をささうと企んでゐるのだらう。エ、悔しい……と鏡に映つた天女のやうな美人に打つてかゝる。妖幻坊は高姫の手をグッと握り、

『アハ、、、、オイ高ちやま、あれはお前の姿だよ。如意寶珠の神力によつて、三十三年許り元へ戻したのだ。お前が十八の時の姿は卽ちこれだ。まだ十八の時は、こんな立派な裝束を着てゐなかつたから別人のやうに見えるが、これが正眞の高宮姫時代だ。此李助はお前の皺のよつた現界的肉体に惚れたのぢやない、靈界で見たお前に惚れたのだ。隨分綺麗なものだらう。それだから、高ちやまに李助が現をぬかすも無理ではあるまいがなア。もしも疑はしいと思ふなら、お前が目を剝けば目を剝く、口を開くれば口を開く。お前の姿其儘だから、一つ調べてみたら何うだ』

『イヤもう疑の餘地はありませぬ。何と立派な美い女だこと、われながら見されますワ之では高姫といはずに高宮姫と舊の名に歸りませうか』

『ウンさうだ、高宮姫の方が、餘程優雅で崇高で、何となく雲上の人のやうに聞えて床し

いやうだ』

『それなら、これから高宮姫と改めます、何卒杢助さま、舊の名を呼んで下さいや』

『ウンよし〳〵、就いては俺も杢助々々と言はれるのは、何だか毘舎か首陀の樣だ、刹帝利に齊しき名をつけねばならうまい……ウン、お前の高宮姫の夫だから、今日から高宮彦と改名しよう』

『それなら高宮彦樣、何卒天地に誓つて、ぢこ〳〵までも夫婦だといふ事を守つて下さいますなア』

『天に在つては比翼の鳥、地にあつては連理の枝、梅に鶯、假令幾萬劫の末までも、忘れてくれな、忘れはせぬぞや。サア〳〵之から其方の居間を案内致さう』

『ハイ有難うムいます』

と妖幻坊に跟いて、ピカ〳〵光る瑪瑙の板を以て造られたる長い廊下を渡り、金銀の色をなせる庭園の樹木を眺めながら、えも言はれぬ美はしき居間に案内された。高姫は既に十八才の娘氣分になつて居た。

『サ、これが奥樣のお居間、隨分整頓して居りませうがなア』

『成程鏡臺から化粧道具、絹夜具から絹座布團、金銀瑪瑙の火鉢、硨磲の脇息、紫檀の机黑檀の障子の骨、玻璃の瓶、白檀の水屋、何から何まで立派な物でムいますなア』

『お前は此城廓の城主の奥樣だ、隨分出世をしたものだらう。之から高宮彦は自分の居間に行つて休息するから、其方は此處で、今日一日はゆつくりと寛いだがよからう』

『私と一緒に、なぜ居つて下さりませぬ。何程立派でも只一人こんな所におかれては、たまらぬぢやありませぬか』

『お前は義理天上さまでムるなり、金毛九尾様も狸、狼、大蛇、蟇其他いろ〳〵のお客さまもムるのだから、別に淋しい事はなからうに……』

『ソリヤ居ります。けれども、聲がするばかりで、チツトも形を現はしませぬから、つまりませぬワ』

『それなら、二人程腰元を、後からつけるやうに取計らつてやる。こんな立派な城内に主人となつた者は、普通の毘舎や首陀のやうに、一間に同棲することは体面上出來るものでない。いざ高宮姫、ゆつくりなされ、高宮彦は吾居間に入つて、暫く休息を致す』

と言ひすてゝ、ドアを開き、悠々として、奥へ〳〵と進み入る。

高宮姫は聲を限りに、

『モシ杢助さま、モウ一言お尋ね致したい事がムいます。此お城は何と云ひますか』

妖幻坊は後ふり向いて、

『こゝは今まで鶏頭城と申したが、今日より改めて高宮城と命名致す』

『ハイ、有難うムいました。高宮城に高宮彦、高宮姫、何とゆかしい名でムいますな、ホ、ヽ、ヽ』

妖幻坊は、

『左様なら』

と云ひすて、ドン〳〵と奥に入つた。

すべて妖魅は變相する時は非常に苦しいものである。それ故時々人に見られない所で體を休める必要がある。高姫の今入つて居つた一間は、其實浮木の森の可なり大きな狸穴であつた。妖幻坊はモ一つ奥の楠の根元の大洞穴の中に身を隠し、他愛もなく寝て了つたのである。

妖幻坊には幻相坊、幻魔坊といふ二人の眷屬があつた。而して幻相坊は火の術をよく使ひ、幻魔坊は水の術を使ふに長じてゐた。又妖幻坊は幻術を以て、一時に數百數千の軍人を現はしたり、妙齢の美人を現はしたり、或時は老翁、或時は老婆を忽ち現はして、世人を騙る事を樂しみとしてゐた。而して妖幻坊は日々獸の肉を喰はなくては、體がもえて仕方がなかつた。又時々人肉をも、殊更喜んで喰ふのである。

高姫は一人美はしき座敷を與へられた事を非常に喜び、知らず〳〵に鼻唄さへ歌つてゐた。そこへドアを開ひて、淑やかに十四五才の女が二人、白綸子の着物に紫縮緬の袴を穿ち、美はしき漆のやうな下げ髪を紫の紐にてしばり、上に桃色の袿衣を着て、

『御免なさいませ、卑様のお居間はこゝでムいますか。私は高子と申します、妹は宮子と申します。今日から高宮彦様のお指圖によりまして、姫様のお小間使を仰せ付けられました。何分不束な者でムいますれば、何卒叱つてお使ひ下さいませ』

と優しい手をついて、頭を下げ挨拶をする。高姫は二人の姿を見て、

『あゝ何と、揃ひも揃つて美しい娘だなア。併しながら今はまだ年が若くて大丈夫だが、此女が二三年もたつたら、丁度私のやうな姿になるだらう。そした時は、又杢助さまが變な心を起しはすまいか』

と思ふと、俄に此二人が、何處ともなく憎らしいやうな氣になつて了つた。高姫は舌長に、

『ハイ、お前は高宮彦様の身内の者か、但は、ごつからか頼まれて御奉公にあがつてゐるのか、それが聞かして欲しい、其上でお世話になりませう』

高子『ハイ、妾は父もなければ母もムいませぬ』

『父母もない子が何處にあるものか、ハヽー、さうすると、お前は捨兒だなア。そして宮

子、お前の父母は何と云ふかな』

『ハイ、妾も兩親がムいませぬ』

『兩親の分らぬやうな子供は要りませぬ。何處の馬の骨か牛の骨か分らぬ、女つちよを、ヘン、此素性の高き高宮姫の、お小間使なんて、高宮彦さまも餘りだ。コレ兩人、こちらに用はないから、トットと歸つて下さい、そして此城内には高宮姫が今日限りおきませぬぞや』

高子『左樣なれば、姫樣、是非がムいませぬ、妾と妹が兩親がないと云つたのは外でもムいませぬ、實は如意寶珠から生れた者でムいます。妾は火を守護し、妹は水を守護する靈でムいます。貴女は火と水がいらないとみえますな。左樣なれば仰に從ひ歸ります』

と足早に室外へ出ようとする。高姫は驚いて、

『マ、、待つて下さい、ヤ、小母さまが惡かつた。つい何う仰有るかと思うて、お前さまの氣をひいてみたのだ。潮干潮滿の、お前は玉だつたな。ごうもそれに違ひないと思つたけれど、それとはなしに小母さまが探つて見たのだから、何卒惡く思つて下さるな』

高子『ハイ、有難う ムいます、併しながら姫樣から一遍追つ立てをくつたので御座いますから私は火でムいます。何卒お暇を下さいませ。なア宮ちやま、お前さまだつて、さうでせうね』

宮子『私小母さまには追ひ出され、小父さまの所へ行つては叱られちや、立つ瀬がありませぬワ。私は水の精だから、川の瀬へでも行つて流れませうよ』

『コレ〳〵、高さま、宮さま、何卒、さう言はずに、私の所に居つて下さい。餘り氣儘な事を云つたと云つて、高宮彦さまに此小母さまも叱られる。又お前たちも叱られちや大變

だぜ。サア〳〵、小母さまが大切にして上げるから、機嫌を直してくるのだよ』

二人は、

『アーイ』

と細い涼しい聲を揃へて云ふかと思へば、光線の如くパッと室内に入り來り、右と左から高姫に飛び付いて、

『小母さま、姫さま』

と嬉しさうに叫んだ。高子は火の如く熱く、宮子は水の如く冷たい。高姫は火と水に責められ寒熱に苦しんで、忽ち其場に目をマハして了つた。

（大正一二・一・二六　舊一一・一二・一〇　松村眞澄錄）

第一〇章　女異呆醜（一三二五）

妖幻坊の曲神が　曲輪の玉を使用して
夢幻の樓閣映出し　名利と戀に心魂を
蘆かし狂ふ高姫を　うまく誤魔化し萱草の
茫々茂る森林に　誘ひ來りいろ〳〵と
塵や芥や糞尿を　至善至美なる宮殿や
其他百の珍品と　眼くらませ狸穴に
引き入れ茲に曲神は　天地を救ふ生神の
誠の道を攪亂し　天の下をば悉く

暗こ泥ここの魔界こし
樂しまむこて心力の
實にも忌々しき次第なり
高子の素性は幻相坊
妖幻坊の兩腕こ
高姫心の誇りより
浮び方なき魔の中に
天下に無比の出世を
日の出神の義理天上
亦高姫こ同樣に

暴威を振ひ永久に
あらむ限りを盡すこそ
高宮姫に仕へたる
宮子の素性は幻魔坊
賴みきつたる妖怪ぞ
曲の手管に乘せられて
陷りながら欣然こ
なせしものぞこ勇み立ち
金毛九尾醜神も
妖幻坊に欺かれ

惡魔の機關こ使はれて
寒こ熱こに冒されて
暫くありて甦り
二人の侍女はイソ〳〵こ
藥を煎じ湯を沸し
盡して仕へ居たりけり
怒りもならず顏色を
『ほんにお前は如意寶珠
尊き玉の御化身か
貴女の樣なお身魂を

喜び居るこそ憐れなれ
一度は失神したれども
四邊を見れば高、宮の
高姫司の介抱して
一心不亂に眞心を
之を眺めて高姫は
和らげ二人に打向ひ
潮滿玉や潮干の
眞に畏れ入りました
何程日の出神ぢやこて

お使ひ申すは何ごなく
何卒貴女は高姫に
金剛不壞の神力を
尊き神の御敎を
道を照らさせ給へかし
賴めば二人は首を振り
高宮彦の御命令
高宮姫の側近く
命令受けて居りまする
何卒お使ひ下されて
勿体ない樣な氣が致す
構はず寶座に現はれて
完全に委曲に現はして
世に輝かしウラナイの
お願ひ申す』　と手を合し
『いえ〳〵私は本城の
天にも地にも代へ難き
仕へ侍れと嚴かな
不束なれど吾々を
日の出神の神業の

萬分一に御使ひ
願ふ姿ぞ殊勝なれ
『高子よ、宮子よ、汝は又
變性男子の御系統
日の出神の義理天上
高宮姫の側近く
之に越したる幸福は
之から先は神妙に
一つも背かず聞くがよい
持たせ給へば神力が
遊ばし給へ』　と手を合し
高姫ます〳〵圖に乘つて
如何した身魂の因緣か
常世の姫の御再來
かゝらせ給ふ生宮の
仕へ奉ると云ふ事は
又と世界にあるまいぞ
高宮姫の云ふ事を
高宮彦は如意寶珠
斯くも立派に現はれて

清く輝きましませど
人民界に籍を置き
智勇兼備の勇將だ
到底神には叶ふまい
姿を現じ居るなれど
も一つ奥のまだ奥の
御殿にまします月の神
日の出神の義理天上
登き身魂の肉の宮
高宮姫は義理天上

あの寶玉を手放せば
普通の人より勝れたる
さはさりながら人間は
此高姫は人間と
高天原の最奥の
天極紫微宮の其奥の
日の大神の御子とます
もう此上はないと云ふ
神人感合した上は
日の出神は私ぢやぞえ

曇り果てたる暗の世を
ヤツパリ日の出神様が
五六七の神世と云ふ事は
嚴の御靈や瑞御靈
日の出神の又の名だ
こんな事をば云つたとて
さはさりながら如意寶珠
一旦私の腹中に
さすればお前は吾娘
こゝに母子の廻り會ひ

日の出の守護にしよと思や
御用を致さにやなるまいぞ
日の出の御代と云ふ事だ
ミロクの神と云つたとて
お前は年が若い故
分らないのは無理はない
金剛不壞の身魂なら
這入つて生れた生魂よ
變化の法で世に出でて
ほんに嬉しい事だなア